
路地裏のお月様

透凪真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

路地裏のお月様

【Zコード】

N3154T

【作者名】

透風真白

【あらすじ】

山田 花は悪態を吐きつつも他人を放つておけないお人好し。そんな彼女は巻き込まれ体质な女子大生。ある日訪れたお店の店主になぜか妙に懐かれてしまった花は…？ 基本的にコメディー。時折シリアス。けれども結局明るいお話目指して頑張ります。

第一話「裏道の小道にて」

最近では、珍しい名前を付ける親が多い。一見してわかる名前の
が、逆に珍しいと言えてしまうのかもしれない。それも時代なのか
かもしれないが、カタカナに無理矢理漢字をあてはめるのは、どうし
ても暴走族を連想してしまい、いつも彼女はむつり、と静かに眉を
顰める。

「なんていうか、惜しいよね」

そんな彼女の名前をみつめでは、苦笑する者、笑いを堪える者、
固まる者、憐憫の情をもみおす者、と様々であるが、この台詞を一
度は眞、口にする。

「まあね」

山田花やまだはなは今日もため息混じりにそう答えるのだった。

「山田一」

名前を呼ばれて顔を上げた花は、向かいに腰をかけた男をちらりと
みつめ、それから視線をまた定位位置に戻した。

毎時の学食というのはどこもかしこも騒々しいもので、ひとりで
食事をする一部の学生をのぞいては、その場に居るほとんどの者が
楽しそうに笑い声をあげている。彼女も、つい数秒まではその例外
に該当するひとりであった。

ずるずると豪快に麺をすする音が響いて、同じテーブルに着いた
田の前の男はそれがあからさまに嫌そうな顔をしている。

「女子が普通、そんな豪快にカレー「ひどん」をするか？いや、男子でもそこまでやらねえよ」

はねるのを気にしてちまちま食べるなんぞ、なんと女々しい。花は、控えめの茶に染めたショートボブにも、着ている白地に紺の水玉模様のシャツにもカレーがはねるのをまるで気にする様子もなく、心中で許可なく向かいに座っている男を罵りながらも無言でうどんを咀嚼していた。

水をぐい、とこれまで豪快に飲めば、しかしテーブルにコップを置く仕草は纖細なものであり、彼女の所作がいかに美しいかを物語つていた。

もつとも、田の前の男はそれに気が付くほど男として立派ではなく、なんの感慨もなしにそれをみつめでは、呆れの息を吐き出しつつ頬杖をつく。

「なあ、みどりちゃんさあ、彼氏いないって言つてたじちゃん

「ひどんを食べ終え、あとは席を立つだけになつた彼女に、物憂げな様子で男は語りかけてくる。面倒事かと顔を顰めながらも、この場をあとにできないのはお人好し気質の性なのか。しかして花は、それを自覚してはいなかつた。

「佐藤、その話長いの？私、次あるんだけど」

腕時計をちらりとながめて、花は田の前の男、佐藤に声をかける。佐藤は、俺今日午前で終わりだもん、と悪びれることなくそつ言葉にした。

花は一瞬なにかが爆発しそうになつたものの、それを胸中でなんとか処理し切れれば、ため息を吐いてわかつた、と口を開いた。

「私も次で終わりだからそのあとだつたら話聞くけど」「

口を尖らせて少しふて氣味だつた佐藤は、花の言葉を聞くと先程までが嘘のようにぱ、とその顔を綻ばせた。

「え、マジで？じゃあ終わつたらメールいれてよ
「へえへえ」

トレイを持つて片付けを済ますと、花は次の教室へと向かう。その間にも何人かに男女かかわりなく声をかけられる彼女であつたが、それらを適当にかわしては目的地へ一直線に歩いた。

山田花に対する他人の評価は、わかりやすいようでわかりにくい。ある者は彼女をクールと言い、ある者は彼女を面倒見が良いと言う。しかし総じて皆が言つのは「結局見捨てられない」という言葉で、彼女は面倒がりながらも、冷たい言葉を放ちながらも、自身に困つて縋りついて来る人間をにべもなく見捨てるとはできないのだ。だからこそ今日も彼女は、たくさんの迷える子羊達に愛の手をさしのべる。内心で心底面倒だとぼやきつつ。

おせつかいと言われるほど自ら首を突つ込まない。しかし来る者は拒まず受け入れてしまう。巻き込まれ体質な悪態を吐くお人好し。山田花嬢は、そんな不思議な勉学に励む21歳であった。

「うう……胃がむかむかする」

授業が終わり、佐藤と合流した花は、最初は近場の喫茶店にて話を聞いていたものの、そこから何故か人数が増え、あれよあれよという間に場は居酒屋へ、そして一次会のカラオケへ、といった具合に気が付けば一夜が明けていた。

電車組は始発が動き出したので帰る、と思い思いに散つていったが、何人かに足止めをくらつた花はまたも24時間営業のファミレスでモーニングコーヒーを飲みながら相談とも愚痴ともつかない話に付き合つはめになり、終わったのは今、午前9時を回つた頃であった。

大学の近くであったのは徒歩組の彼女としてはありがたかったが、それにしたつてひとり暮らしの花の家は徒歩20分と近くも遠くもない微妙な距離だ。徹夜で人様の相談事を腹に収めた花としては、この距離は些かしんどいものがある。

花は夜はあまり通らない、飲み屋街が立ち並ぶ裏通りを歩こうと目の前の道を右折した。ほんの5分程ではあるが、一応は住んでいるアパートまでの近道になる。

ぼんやりとした頭でふらふらと裏通りを歩けば、閑散とした様子の裏道がある。夜とはまた違つた風情のそれらを眺めては、花はふと裏道の更に奥まつた道に目がいった。

あんな通りはあつたろうか、と首を傾げながら、左に位置するその小道をちらと視界に入れてみれば、そこには古めかしい看板があつた。

立て看板には「月見堂」と書いてあり、花は一瞬、和菓子屋かなにかだろうか、と考える。

小道の先は行き止まりで、そこに入れば単なる寄り道になつてしまい、真つ先に帰りたいと思つていた花の心はしかし好奇心が勝り始めていた。

寝ていらない思考回路はどこかがおかしくなつてしまつたのか、いつもならば面倒だ、と一蹴する事も興味をひかれてしまう。

それならば、と花は心に素直に従えば、小道へと歩を進めた。

「月見堂」と書かれたその店構えは、まさしく古めかしい、と評価した看板そのものであつた。

昔ながらの平屋に、月見堂、と書かれた看板を載せ、開け放たれた店には所狭しとあらゆる雑貨物が置かれている。それはアンティ

ーク調の可愛らしいものから、奇妙奇天烈な面まで、一体こここの店
主の趣味はどうなっているのだ、と疑いたくなる。

店の敷地からはみだして置かれた棚には、本がぎゅうぎゅうに詰
められており、売り物であろうが分類が滅茶苦茶で、ここから氣に入りの本を手にするのはなかなか骨が折れそうな作業であった。
花はぽかん、とそれらを眺めていたが、やがてひとつ指輪に目
がいった。

店の少し奥側にあつたそれは、小さめのガラスケースにあるひとつだつた。ケースは少し埃をかぶつていて、花は取り出したハンカチで少しそれを払うと、クリアになつたケース越しに再度指輪をまじまじとながめた。とても可愛らしい、はめこまれた黄色の石は鈍く光り、それが月を思わせるやはりアンティークらしいつくりのものだ。

「……これ、本物なのかな」

一応はガラスケースにおさまっているが、見ると鍵がかかっているわけでもなんでもない。あくまでも埃避けに一応かぶせてあるんですね、といった具合で、値が張るようなものには見えなかつた。
そうではなくとも、花は特に宝石に詳しいわけでもなければ、装飾品を付ける事に格別に執着しているわけでもなく、ともすれば年頃の同年代の女性達よりはるかに目利きは悪いほうであつた。

そんな花が何故この指輪に惹かれるのかは、彼女自身もわからなかつた。ただどうにも、この指輪を放つたままここを離れ難い。そんな感情が彼女の胸中を支配していた。

「その指輪、気になりますか？」

唐突に耳元で響いた声音に、花はぎやあ、と色氣のない悲鳴をあげては身体をびょん、と横に跳ばした。脳内ではゆうに3mは越え

たのではないか、と思つたほどであつたが、もちろんそんなことはない。いまだ声の主は、花の傍近くに微笑んで立つていたのだから。驚きに跳ねた心臓を落ち着かせながら改めて声の主を確認すると、それは男性だつた。

微笑んだ佇まいはなんだか酷く儂げで、しかし体の線が細いとかそういうことではない。特別筋骨たくましい、というわけではないが、かといって細くもない、一般的な男性のそれとなんら変わりはないがつた。

ただ、その表情だ。

厭世的と言うか、浮世離れしているというか。とにかく花や、今の日本を生きている人間とはどこか違つた時間軸に身を置いていそうな、そんな雰囲気があるのだ。

花は少し警戒しつつもその顔を観察する。艶やかな黒髪はだらしなく前髪が伸びており、なかなか顔を確認し辛いが、のぞく瞳は随分と色男だとうかがい知れた。ぼつり、と目元に付けられたほくろはまた怪しい色香を放つており、女性が放つておかなそうな雰囲気をすぐに感じ取れる。

なんにせよ、第一印象ではあるが、花はこの男性にどうも好感を持てそうになかった。どこをどう、と訊かれれば難しいのだが、とにかく本能的な何かが花に近付くな、と告げるのだ。

しかしそんな花の思いとは裏腹に、男は首を傾げて花に再度声をかける。

「あの、この指輪、いいませんか?」

男の声に我に返れば、花はへつゝと間抜けな声をあげる。そうして男が指示するガラスケースへと視線をやつた。

「あ、ああ。はい、気になつたんですけど……今、手持ちがあんまりないもんで」

財布の中身が5千円ばかりなのを思い出し、花はぽりぽりと頬をかく。結局、諦める他ないだろ？、と結論を出せば、またきます、と言い残して、花はその場を去ろうとした。

しかしその前に、男が花の腕を掴み、歩みを阻止した。

「ずっとみつめていらしたのでしょうか？」

「え、うわ」

「ああ、ほら、ぴったりだ」

素早い動作で掴まれた花の左手に、男はするり、と指輪をはめる。花はぎょっとして、はめられた手を凝視した。

左手の、しかも薬指。鎮座しますそれをながめては、花は小刻みに震えた。

異性に左手の薬指に指輪をはめられるのは、人生初である。花はそれを認識すれば、震えだけでは飽き足らず、みるみる頬を赤らめていった。

「あああ、お、おいくらですか」

なんとか震える声で言葉を発すると、それをどう思ったのかくつと面白そうに笑いながら、男は首を振る。

「お代はけつひとつです。そういうものは、愛してくれたひとのものとへゆくのが一番良い」

「いえ、でも」

「どうせ安物ですから。ただ」

言葉を切つて、微笑む男の妖艶さに、花は初めて彼の人間臭い部分を見た。

それに驚いて固まっている間に、男は花の耳元まで唇を寄せると、そつと囁く。

「また来てね」

言ひて、食まれた左の耳はおかしいくらいに熱かった。花は全身を真っ赤にさせると、悪態を吐くことも忘れて、あらん限りの力で持つて叫び声をあげると、一皿散に逃げていった。静けさを取り戻した小道を、男は一瞥すると、くす、と吐息だけで微笑む。

「……可愛い」

涙目で震えた初心な女の子を思い出しながら、男は咳く。誰に聞かれるとも咎められることもなく、男は店に用意されたパイプ椅子へ腰をおろすと、じにから取り出したのか手にしていた本を読み始めた。

『なにあの男、なにあの男、なにあの男…』

顔を真っ赤に染め上げ、だるいと感じていたのが嘘のように、ものの10分で家までの距離を走り抜いた花は、息を切らしながら玄関でへたりこんでいた。

いまだ余韻覚めやらぬ耳をおさえながら、苦しげにうめいては先程の男を反芻する。

「つい、やめ！思い出すなー！」

シャワーでも浴びよつ、やうしょーつー誰に言ひてもなく自身に言

い聞かせるよつに声を上げれば、花は
靴を脱いで箪笥の引き出しを勢い良く開けた。
やじでふと、忘れていた事実を田にす。

「あああー。」

声を上げて、左手を田線まで持つてくる。

指輪は、返すつもりであったのだ。タダより高いものはない、とは実家にいる母親の弁である。花も、まったくもってその通りだといつもうなずいていた。

そうなれば、花の答えは決まっている。

「返しにいへしか……ねえのか」

がつくり、と肩を落としてその場につりひしがれる。
できれば一度とお田にかかりたくはなかつたが、こうなつてしまつては仕方がない。

花はため息を吐いて指輪を抜くと、小さな鏡台の前にそれを纖細な動作で置いた。

「まさか、ね」

それを見越してあのような事をしたのではないか、と花は男の考え方を読み解こうとしたが、さすがにそれはなかろう、と結論を下す。そもそも初対面でなにをどう思われるわけもないのだし、花がもう一度と来ないようにしてみつと思つたのも、向こうにだつて悟られてはいなかつたはずだ。

花は着替えとバスタオルを手にすれば、昨日から先程までにかけての疲れをすべて洗い流してしまおう、とため息を吐きつつも立ち上がつた。

第一話「裏道の小道にて」（後書き）

新連載始まりました。よろしくお願い致します！

第一話「謎な店主の真意はいか」

次の日にでも返しに行こうかと迷っていた花であったが、一度指にほめると妙にしつくつくる女の指輪をみて、どうしても返すのは口惜しいと考え始めていた。

しかし、である。

やはり無料で進呈される義理もなにもなこと感じれば、花はため息を吐く。結局、これがどれほどの価値なのかもわからない。

「うーん、古いっぽいけど… 一万とかするのかな」

呟いてまじまじとみつめた指輪は、しかし自身の値打ちを答えてくれることはない。

なんとかあの店主に会わずにこれを返す手段はないものかと考えたが、あんなに近場であるのに郵送するのは馬鹿馬鹿しいし、住所もわからない。第一、破損してしまっては元も子もない。

あれやこれやと考えて、結局、花は手渡しで返すのがいちばん良いのだろうと最初に導いた結論に戻らざるをえなかつた。

「で、なんでそつなるんだよ」

「うるさいな。金曜日に色々話を聞いてやつたんだからそれくらいしてくれてもいいでしょ」

「場所がわかんねーって」

「……だから、すぐそこまでは一緒に行くから返すのだけ佐藤がやつてよ」

「なんでそんなに嫌なわけ?」

「私の本能がダメ、ゼッタイと告げたのでな」

月曜日の大学にて、同じ講義を終えた佐藤を捕まえた花は、月見堂にて起こつたいきさつを話した。そうして頼んだのだ。指輪を店主に返してはくれないか、と。

花は元来礼儀正しい人間で、正直これはかなり不本意だ。しかし、元々から近付きたくない雰囲気を醸していた男が、更に危険視せねばならない行動をした為に、もう半径3m以内には寄りたくない、とどう頑張ってもそう体が本能で告げてきてしまうのだ。

初対面の女性の耳を口に含むなど、非常識どころの話ではない。高校時代の恋人にさえされたことがなかつた行為を許してしまつた事実に、思い出してはまたもや花は沸騰しかけた。

「……別に良いけど。一体なにをされたのかなあ？」

「やにやしながら指輪を入れた小さな巾着袋をみつめる佐藤を、花は睨みつける。

「うぬわー。詮索無用」

「巻き込まれるんだからそんくらい教えるよ」

なおもにやつく佐藤をさらに睨みつければ、花は伝家の宝刀を出す。

「もう一度とあなたの相談には」

「申し訳」やいませんでした」

「よひしー」

午前授業で一日を終えたふたりは、揃つて月見堂へと足を運ぶこととなつた。

大学を出て、駅前にぎやかな表通りを歩く途中で、裏道へと入つていく。やはり午前中は表通りと違つて閑散としており、どの店

も扉にはクローズの文字がぶらさがっていた。

スナックやら赤提灯の店やらが立ち並ぶ中、見えてきた左側の小道に、花はたまり、と汗を一筋流した。

「佐藤」

「ああ、ここか。……うーわあ、本当わかり辛いな」

「でしょ。今まで気付かなかつたんだよねえ」

「で、あそこの店でこれを返してくればいいのね」

花は無言でうなずく。佐藤はそれをみて同じように首肯すれば、いつてくる、と巾着袋を握り締めて小道の奥へと進んでいった。ここに立っていると少しのぞけば花が居る事がわかつてしまう。花は少し裏通りを歩いて、表通りの入り口付近で歩を止めた。ここにいればとりあえず捕まることはないだろう、と息を吐く。

車がひつきりなしに通り過ぎ、たくさんの店が立ち並ぶ表通り。駅付近にあるデパートも割りと規模が大きいものだ。大学もあることから、この辺は高級な店と学生が通えるような安い食堂のような店や、ファミレス、カラオケ、ゲームセンターなども入り乱れている。地元の高校生であろう集団を目で確認した花は、はて、何故平日の午後にさしかからうかという時間に彼らは居るのだろう、と疑問符を浮かべていた。

しかしして、花は、首を傾げた。

腕時計を見ると、もう既に10分程時間が経過していた。ただ指輪を返すだけで、こんなにも時間がかかるものだろうか。

花は何事かが起こったのだろうかと、ちらと裏通りに目線をやる。踏み出そうかどうしようか迷つていると、ポケットにいた携帯電話が震えた。

着信に慌てて出れば、佐藤が弱りきつた声でこちらに来てくれ、と声をあげているではないか。花は役立たずめ、と冗談とも本気ともれない口調で毒吐けば、電話口で佐藤の唸り声が響いてきた。

花は結局それを了承し、重い足取りで今来た道を戻つて行つた。

「……まさか指輪を返却しに彼氏を寄越すとは思つていませんでしたよ」

「こりと微笑んだ月見堂の店主に、花は思わずはあ？と間抜けな声をあげる。困った顔をする佐藤を見て、恐るべくついに話したのだろうな、と命題がいった。

「まあ、その、そういうわけなんで、他の男性からの贈り物は受け取れないんです」

花もそれならば、と話を合わせて店主をみつめた。佐藤が持つていた指輪を受け取ると、花はすみません、と添えて店主にそれを突き出した。

店主はいえ、と首を振れば、人好きするような微笑を再度浮かべた。花はそれに不穏な何かを感じ取れば、口元を僅か引き攣らせる。

しかしそんな花に何を思ったのか、表情を変えることなく佐藤へと目を向ければ、店主はそのまま彼へと声をかけた。

「先程は失礼しました。でもやはりご本人様以外からは受け取りたくなかつたものですから」

「え？ ああ、いえ。俺も、失礼だったかな、と思ひますから」

慌てて首を振る佐藤を見て、どうやら揉めたといつよつは笑顔で拒否をされ続けたのだろうな、と花は予想していた。

理性的にやんわりと言わてしまえば、佐藤もそれ以上はなかなか対応し辛くなる。先程の心底困つたよつた声も、そういうことならば、と納得できた。

「ですが、彼女は随分とこれを気に入つた様子でしたよ。これを期にいかがですか？指輪をプレゼントして差し上げるといふのは」

店主の言葉に、花も佐藤もぎょっとする。

確かに、ふたりが恋人同士であるならば、ええ、いいですよー、と照れ混じりに花が言い、そうだね、そんなに気に入ってるなら、と佐藤が答えるべき済む話かもしれない。

しかし、ふたりはあくまでも友人だ。それ以上も以下もない。佐藤には愛しい想い人もいる。変な噂が立つのもお互いに御免被りたかった。

「い、いえいえいえ！彼も私も一人暮らしの学生でお金ないんです！そんな高価なもの買えません！」

「でしたらお安くしますが？」

「いやいやいや、それこそ悪いですよー返しに来た意味がないでしょー！」

全力で否定する花に、微笑む店主。なかなか受け取らない男にしひれをきらした花は、とにかくそこいらへんに放つてでも逃げてしまおうと考える。

ちらり、と視線をすぐ傍の棚へうつしたところで、店主の瞳がきらり、と光った。

「女の子はね、男からプレゼントを貰つたらにっこり笑つてありがとう、と受け取るべきなんだよ」

「言って、店主は花を抱き寄せる。横で見ていた佐藤は急展開にぽかん、と口を開けて突っ立つていた。

花はなんとか暴れてその腕を逃れようとするが、いかんせん力が

強い。

「……自分の彼女が見ず知らずの男に抱きつかれてるのに怒らない強い。」

「……自分の彼女が見ず知らずの男に抱きつかれてるのに怒らないの？」

小首を傾げて問うたその視線の先には、間抜けな状態で意識を飛ばしていた佐藤がいる。我に返った彼は、しかしどうしたものかと狼狽した。

正直、気の毒ではあるので助けたいのはやまやまだが、友人としてどこまでしていいのかがわからない。確かに今は恋人ではあるが、それはあくまでこの場限りの設定だ。

たとえば花が愛しのみどりちゃんだとするならば、自分はどりちゃんの手から彼女を救い出すだろうか。しかしいかんせん、そこまでの妄想癖もないのだから、そろそろ気持ちをもつていけない。馬鹿馬鹿しいことを思い悩んで固まる佐藤に、花はついに顔を真っ赤にして怒鳴つた。

「ちよっと佐藤！ あんたあれこれ考えてないでとりあえず引っ張りなさいよ！ 助けないで放置つてどうこうことだこのへたれ野郎！ そんなんだからいまだにフリーなんだよ、みどりちゃん！」

花の言葉に、今度は佐藤も顔を赤くする。

「つるせえな……」の男くらいい押し強きやなびくのかよ！」

「はあ！？ 馬鹿じやないの！…？ これはね、単なる痴漢行為一つつか離せよいかげん！ 顔良きやなにされても許されると思つてんじやないわよ！」

花の言葉に満足気に微笑んだ店主は、その言葉を受けてかやつと

彼女を解放した。

「ぜえはあ、と肩で息をする彼女をさすがに不憫だと感じたのか、大丈夫か?と佐藤が背中をさする。

「も、あんたねえ……だからそつ、深く考えるのをやめなさいって!いいじゃない、もし振られたとしたってみどりちゃんの中ではんたは自分を好きな異性ってカテ『ゴライズされんのよ?・女の子つてえのはね、生理的に無理でもなく、自分の好みからあまりの範疇外でもなければ好意を寄せられて断り続ける子なんてそつそういうもんよ。まずは言つ。そんで程よく押す!」

「だからそれが出来たらとつべにやつてるつて

「そんなどから良い人止まりなんだよ」

「つむせえ!気にしてることを言つなかー!」

背中をさすつている手を止め怒鳴る佐藤に、へたれめ、と半眼で言つ花は、すっかりここがどこであるかを忘れていて、かけられた声によつてそれを思い出した。

「やつぱり、恋人じゃないんだ」

「え

微笑んだ店主は、花に鋭い双眸を見せながら、佐藤へと視線をやつた。

「ねえ、サトウクン。彼女のお名前は?」

「え、山田花ですけど」

「このお馬鹿!何故答える!」

「あ」

間抜けな短い声をあげる佐藤に、花は呆れて何も言えない。

完全に人選ミスだつた、と手で顔を覆つたとき、花は気が付いた。左手になくなつたものがまたしても収められているという事に。

「はな、つて華麗のほう? それとも花屋のはなかな」

「ああ、花屋のほうですよ」

「だから答えるなつづーの」

べし、と佐藤の額をはたけば、またも佐藤が間抜けな声をあげる。その様子におかしそうに笑つた店主は、やつぱつやつだよね、とうなずいた。

「そつちのが可愛い。花ちゃん」

「呼ぶな、減る」

「つれないなあ、良いね。ゾクゾクする」

その言葉に、花は全身を慄かせる。正直、彼女のがよほどぞくぞくしてこる。舌を出してペロ、と唇を舐めるそのままは、獲物を狙う肉食獣そのものだ。

「サトウクンにこんな役目を頼むつて事は、花ちゃん恋人もいないんでしょ? ならやつぱりそれは返品しなくていいよ。俺から花ちゃんにプレゼント」「アーッ」

「……タダより高いものはなつて母に何度も言われてきたんですけど」

「だから、ここまた来てくればそれでいいよ?」

やつ取りにつきあつした花は、仕方なく観念する」とした。

「わかりました。お支払いします。……おいくらいですか?」

「それ?ええーと……20万はしなかつたと思うんだけど」

「はああー?」

首を傾げ、いくらだつたつけと呴く男に、花も佐藤もすつとん
きょうつな声をあげた。

「「」にじゅうまんえんー?」

「貧^{ハシ}生^{ジン}にほんと払^ハえる金額^{ヒガク}じやねえよー。」

「あやじあやいと叫^ハぶふたりを他所^{ハコ}に、店主はああ、と声をあげる。

「確か18万とかそこらだつたかなあ。ね、たいした金額^{ヒガク}じゃない
でしょ?」

微笑む店主に花は蒼褪め、なんとか指輪^{ヒナリ}を返^{スル}そ^レと声をあげる。
ふたりのやり取りをどうしたものか、と見ていた佐藤だったが、
ふと手にしていた携帯電話に表示^{ヒツヨウ}されている時刻を見て、あ、と呴^ハいた。

「山田、もうバイトの時間じゃねえ?」

「え? げつーやばい!」

時刻は11時50分。今日は早上がりさせたほしいといつ人の為
に花は12時から働くことになつていていたのだった、と思い至り、慌
ててその場を走つた。

残された男ふたりは、去りゆく彼女をただぽかん、とながめ、そ
の後渴いた笑いを起こしたふたりの間に微妙な空気が流れたことを、
花は知る由もない。

バイトが終了^{ハラフ}し、佐藤から謝罪のメールを貰^ハった時には、花には
一体なにを指してのものなのかはわからなかつた。正直、今日やら
かした佐藤のミスは多すぎる、と花には思えたからだ。

ため息を吐いて短く返信し、花はアパートへ帰路に着いた。

「ただいま、つと」

誰もいない部屋の中に向かってそう声をあげてしまうのは、彼女の癖だ。実家の皆は元気だろうか、と思いながら、花は靴を脱ぐ。正月には帰ったが、三年生になつてからはまだあちらに帰省していない。そこまで遠い場所にあるわけではないのだが、かといって近いわけでもない。

新幹線を使つたり、飛行機を使つたり、そういうことをせずとも帰れる距離はおそらくありがたくはあるのだが、それでもここから帰るとなるとそれなりの覚悟をせねばならず、実家は決して嫌いな場所ではないし、むしろ家族仲は良いくらいだったが、花はその中途半端な距離感に多少うんざりした。

季節はもうそろそろ夏になる。半年は帰省していないので、そろそろ親からも催促の電話がかかってくる頃だろひ。

「うーん、夏休みいっぱいはあつちにいようかなあ……あ、でもバイトあるしな

休めてもせいぜい一週間程だ。花はどついたものかな、と呟きながら床に寝そべつた。

そうして左手と床が触れた瞬間に生じたこつん、という控えめな音に目を見開けば、花はしまつた、とその体を慌てて起こす。

18万円の指輪。まさかそんな値の張るものだとは思いもよらず、随分とぞんざいに扱つてしまつた、と焦りを覚える。小物を入れる引き出しに巾着袋に入れたまま、花はそつと指輪をしまつた。

あの店主は一体何がしたいのか。

疑問はどんどん深くなつていくものの、花はそれを訊きたくはないような気がした。

訊いてしまつたら、もつと面倒なことになるのではないか、と
これまた本能が告げているからだ。

明日は午後からだといつ事實にほ、と息を吐き出して、花は再度
床に寝転がつた。

毛足の長いラグに包まれて、ふわふわとした気持ちになりながら、
このまま寝てはいけない、とわかつていつつも誘惑に勝てそうもないと思えば、花はゆるゆると目を開じていつた。

一人で暮らすには随分と広い一軒家は、今はもうひとは住んでいないと言われても信じられそうなほどにものがなかつた。
無機質な空間はいかにも寂しく、男の心情そのものなかもしない。

寝室の扉は開け放たれたままで、四人は寝転がれそうなベッドの上に居るのは妙齢の男女ふたりだ。

空間を広く取つたつくりのそれらを見て、彼女ならばどんな反応をするのだろう、と男は微笑む。その腕に抱いている女性はしかして思いを馳せている女の子とは全くの別人で、さすがに気が咎めた男はすぐさま目の前の女性へと意識を戻した。

情事の名残を見せベッドの上で横たわる彼女は簡単に言つてしまえば綺麗で、けれども男の精神を搖るがす何があるわけではない。それでも、今日を共に過ごしてくれる日の前の彼女を、男はひどく愛おしいと思つた。

上機嫌に声を弾ませて、男は女へと声をかける。

「こ」の前ねえ、面白い子がお店に来たんだ

「ふうん? 何、もつしちやつたの?」

「俺は頼まれなければそんなことしないよ」

「あら、失礼ね」

「もちろん、君と一緒に眠るのは好きだよ」

「言ひて、ふふふ、と笑いながら、ベッドの中で横たわる女の懷に寄り添つように、男はぴったりと身体を寄せた。

女は、長い髪をかきあげると、男のむちむちの黒髪をゆりくつと撫でてやる。

「……可愛いひと」

くす、と笑んで、女が柔らかく言へば、男はそのままゆるやかな眠りへと導かれていった。

第三話「お人よしのやの所以」

「いらっしゃいませー」

客の来店を知らせる電子音に反応して、花は貼り付けた営業スマイルと共に決まりの文句を口にする。少し荒れたおにぎり、お弁当などの陳列を直しながら、新しく納品された商品を検品しつつ品だししていった。

花はコンビニエンスストアで大体週4日ほどアルバイトをしている。時折5日になるので、勤務日数はそうきつちり決定しておらず、まちまちだ。大学も後半に入れば空白の時間も多くなってるので、なにかとシフトを組む時、花は重宝されていた。無茶すぎる事も言わないので、個人的には気に入っている職場だった。

「で、その指輪いまだに返してないんですか
「いいから手を動かしなよ、たかだ高田君」

アルバイト先の後輩にあたる高田は、花よりふたつ下の大学一年生だ。口癖のように会えばおごってくれ、と言つてこの後輩は、なんともお調子者で周りのバイトからも好かれている。

花も、この後輩が実は人間としてしっかりしているのを知つて、なかなかどうして好感を持っていた。だからか、指輪の事をつい愚痴のようにぽろつと口にしてしまったのが先刻のこと。

失言であったかと考えながら、もくもくとおにぎりを陳列していく。そんな花を見ながら高田は小さく笑い声をもらした。

「山田さん、気にしないでもらっちゃえばいいのに。眞面目つすねえ」「そういうわけにもいかないよ

少し口を尖らせてい語り花に、高田は再度ふ、と微笑んだ。

「そういう所がまあ好きなんだけれど」

「ん、今なんか言つた？」

「いいえ。でもその男の人は大丈夫なんですか？あんまり近付かな
い方がいいんじゃない？」

「え、うーん……まあねえ。そうしたいところではあるんだけど…

…」

「案外、その金額だつて嘘かもしれませんよ？」

「そんな嘘ついてどうするのよ。第一、調べたもん」

花の突然の告白に目を丸くすると、高田は調べた？と、驚いたよ
うに同じ言葉を繰り返した。

花はうなずいてそれに応える。

「質屋にいってね。まあ、売ろうつてなつたらもつと値は下がるけ
ど、大体そのくらいだらつて言われた。で、手を動かしなさいつ
て」

「なんとこゝか、しつかりしてるんだかしてないんだかわからぬ
ですね、先輩は」

呆れたような感心したような顔で言いながら、高田はお弁当の陳
列を再開した。

花はその言葉の意味を考えながら田の前のツナマヨを睨みつける。
よく他人から言われるのだが、花自身は割りとしつかりしているほ
うだと信じているのだ。

考え込んでいる花をちらり、とみつめて、高田はこいつそりため息
を吐いた。

「最後の最後で詰めが甘いんだよなあ」

「ん? またなんか言つた?」

「いーええ」

苦笑しながら答える高田に首を傾げながらも、花は特にそれ以上何かを突つ込む事はしなかつた。

月見堂の前で、花は右往左往していた。

たとえばポストのようなものがあつたならば、そこに指輪を放り込んでしまえばいい。そう思つて、普段は通らない時間帯、バイト帰りの午後1~1時を回つた頃にこの場所を訪れていた。

店の規模的に、ここは住居兼ではないだろうと思い至り、その読みはおそらく当たつている。

物音すら全く響かない静寂に、花は安心半分不安半分で複雑な思いを抱いていた。

花は必死になつてあちらこちらに視線をさまよわせてはみたものの、郵便受けらしいものはついぞ見当たらない。

どうしたものだらうか、と途方に暮れて、やがて諦めるしかないのだろうと悟ると、ため息を吐いてその場を去ろうと踵を返した。どす、と何かにぶつかつた衝撃があり、花はよろけそうになる。鼻を擦りながらすみません、と小さく呻く。

「花ちゃん、大丈夫?」

「! ? 店長さん」

驚いて顔を上げれば、必死に会わないようにしていた男とばっちり遭遇してしまい、花は俄かに動搖してしまつ。

面白そうにその様子をながめていた男は、やがて何かを思い出したかのようにああ、と呟いた。

「橘佳月」
「みかづき かづよ

「たちばなよしづか？」

「橘は一般的な橘つて字。佳月はかげつで佳月だよ」

「あ、満月のことですね」

なるほど、とひなずいた花に、佳月は顔を綻ばせる。

「初めて会った日は、ちょうど満月だったね」

「え？ そう、でしたっけ」

「そうだよ」

笑った顔にぽかん、と呆けていた花であったが、今はそんな話をしている場合ではないと思い至れば、ちゅうじここと右手に握り締めていた巾着袋を佳月に突き出した。

「橘さん、これお返しします」

「こんな所にこんな時間ひまつぶすのはよくないな。お家はすぐ近くなの？ 送つていいくよ」

「綺麗に無視をしないでください。これをお返しすると」

「道案内してくれないのなら寄つて行く？ お茶を出しひらこながらできるけれど」

「……」と微笑みながら、花の言葉を「……」とくつ流していく佳月に、どうしたものかと花は唸り声をあげる。しかしそんな反応する楽しんでいる様子の佳月は、ますます笑みを深めていくばかりだ。

「ねえ、花ちゃん」

「なんですか？」

花の質問にはまるで答える様子はない。しかし彼は好き勝手、花に質問をしてくる。それにほとほとあきれ返りながら、花はみるみる体の力が抜けていくのを感じた。

元来の面倒臭がりが災いしたのか、もう「どうでもいい」という方向へと心情が傾き始めている。

「どうしてそんなに頑なの？俺にこれをプレゼントされたのが、そんなに困る事？」

佳月の質問に先程まであきれ返っていた花は、その言葉に目を丸くする。

「何を言つてゐるんですか？常識で考えたら当然でしょ！…二十万の指輪を初対面の女にぽんとやる男がどうになりますか…」

「18万だよ」

「四捨五入すれば二十になります！そしてそんな事はどうでもよろしく…ちょっとそこ直りなさない？」

花の横でへらへらと笑つていた佳月は、憤怒の形相に変わつていく花を見て少しばかり表情をかえる。先程の花のように目を丸くして、珍しいものを見るかのように花をまじまじとみつめていた。直れ、という言葉と同時に、花は、さあほらそこに立つ！と自身の真正面を指す花に、佳月は慌ててはい、と返事をすればびんと筋を伸ばして花の真正面へ立つた。

いつして見ると、身長155cmと平均より些か小さい花よりも、佳月はだいぶ大きい事がうかがえた。ひょっとしたら180はあるのかもしない、と思えば、急に冷静になつた花は脳内の片隅で萎縮という文字を浮かべたが、今更ここで怒りをおさめるのもおかしい。

花は気持ちをなんとか立て直せば、目の前の男を睨む。佳月は、

花の感情の変化を面白がりにみつめている。反省などまるでしないのは明らかだった。

彼のそんな表情を見ていると、苛々が募っていくのはそう難しいことではない。花は忘れていた怒りを再燃し、夜中であるというのも忘れ声を張り上げた。もつとも、飲み屋街の夜は賑々しい。花ひとりが叫んだところで音は見る見るうちに歌う声や笑い声に呑み込まれてしまう。

「いいですか！たとえばポケットに入っていた飴を取り出してあげる、つていうんなら私だってありがとうございますよ！」

「俺にひとつはそれくらいの認識しかないんだけど」

佳月の言葉に、花はまたも怒りを募らせれば、か、と皿を見開いた。

「そんな壊れた常識を身に纏っていてはいつか身を滅ぼしますよー」とにかくです！初対面の人間にむやみに高価なものを譲渡しない！
はい、復唱して！

「ええー、でもさあ、花ちゃん」

抵抗を示す佳月を、花は視線とその低い声音で威圧する。

「橘さん」

「……初対面の人間にむやみに高価なものを譲渡しない」

渋々ながら復唱した佳月を見て、花は満足気に微笑むと、再度巾着袋を彼に差し出す。

「けつこうです。では、これはお返しいたします」

「それは嫌」

「た・ち・ば・な・さん?」

いいかげんにしる、といつ葉を顔に貼り付けながら、微笑む。佳月はその顔にふてくされたように口を尖らせた。

「だつて俺達もう初対面じやないし」

「渡された時は初対面だつたでしょ。そもそも貰う理由がありません」

「俺が花ちゃんにあげたかつたでいうのは理由にならないの?」

「馬鹿ですか。悪い女に騙されても知りませんよ」

「花ちゃんは悪い女じゃないでしょ」

「そんなのわからないでしょ。これも作戦かもしませんよ」

「へえ、どんな作戦?」

ずるずると話がはぐらかされているとわかつていつつも、花はついつこ車に乗ってしまう。これでは駄目だと首を振ると、再度目の前の男を睨みつける。

「とにかく!好きでもなんでもない男の人から指輪は受け取れませんし、身につけようとも思いませんから。こんな高価なもの貰うのも落ち着きませんし、はつきり言つて迷惑なんです」

さつぱつとした口調で断れば、さすがに何も言い返せないだろう、と花は気の早い勝利宣言を心中で高らかに掲げた。

しかし敗北したはずの日の前の男は、その言葉に特に衝撃を受けている様子もない。少し考えた様子で首を傾げれば、やがてゆつくりと口を開いた。

「でも指輪、気に入つてたじやない。ずっとケース越しにのぞいて

た

「！ それは、否定はしません、けど
「だったら迷惑なわけじゃないでしょ？」

「そういうことじゃありません！確かにこの指輪は良いなって思いました。持つて帰りたいって思いました。でも！譲渡されるのに抵抗があるんです。橘さんにタダで貰うのが迷惑なんです！」

「そつか……」

うなずく佳月に、やっとわかつてもらえたのかと思った花は、ほつと息を吐き出した。しかしぬるあらわれた彼の予想外の表情に、花は一步退く。

佳月は、とても人間臭い表情を浮かべて、ただ静けさの横たわる小道へ立っていた。

悪戯っぽく微笑むその様子は、無邪氣とも、とてつもなく残酷だともいえるもので、花はどう反応したら良いものかと迷つ。

一步退いたまま、その場から動けないでいる花は、後にこの時の判断をなぜ間違えたのか、とたびたび悔やむこととなる。

この紙一重の判断の甘さが、彼女がお人好し、巻き込まれ体质だと言われてしまう所以であろう。

「ねえ、花ちゃん」

「は、はい」

「だったらその指輪、花ちゃんが買つてよ」

「はい！？」

「俺から貰うのは嫌なんでしょう？ だったら買えればいいじゃない」

「そんな、パンがなければケーキを食べればいいじゃないみたいに言わないでください！」

「あははは」

「笑うじやなしにー今度は貰い学生から金銭巻き上げる気ですかー」

佳月の胸倉を掴み怒鳴り散らす花に、佳月はやうじやないよ、とのまほんとした声をあげる。

「別にこつまでかかってもいいから。少しづつ払ってくれればいいから、ね？」

「……分割払いつてことですか？でも」

「で、担保は花ちゃんね」

「…………はい？」

にこにこと微笑み自身を描かれた花は、わけがわからず間抜けな声をあげてしまう。

「出来る限りお店に遊びに来て？」

「いや、でも」

「指輪、持ち逃げされたら嫌だし」

「失礼な事を言わないでください！」

「それとも日々の払いをいくらか決めようが？」

「だから返しますと何度も」

「でももうそれ、売り物に出来ないし。割りとなんざいに扱つたで

しょ」

「うぐい」

気になっていた箇所を指摘され、花は言葉を躊躇む。

高価なものだとは思つてもおらず、そこまで丁寧な扱いはしていなかつた。そのせいか、無意識下でつけてしまつた傷などがあつてもおかしくはない。嫌な予感はしたもの、そこを言われてしまつては花は反論ができそつもなかつた。

「そもそもプレゼントしたものだから俺はかまわないんだけど、花ちゃんは性格上それじゃあ収まりが悪いんでしょ？」

「……私の性格を把握するのやめてください」

「花ちゃんは欲しかった指輪が手に入るし、俺は花ちゃんと頻繁に

会えるしで、利害関係一致するし」

「いや、意味がわかりませんよ」

「とにかく悪い話じやないと困つよ」

畳み掛けるように言われて、花は頭を抱える。そもそも始まりからしておかしいのはわかつていたが、もう指輪が売り物にならないのが事実なのであれば、花は結局責任を取らねばならないと感じてしまう。これはもう性質上の問題なのでどうしようもない。

佳月が言ったように無償で譲り受ける事をよしとする人間ならば、とっくにそうしている。それができないといつのであれば、もう簽えは決まっていた。

「……つわかりました。わかりましたよ！分割払いで買います、この指輪！ほんっと一に月々にちょっとしか出せませんよー。」

「うん、それでいいよー、100円でも200円でも」

「……さすがに、月々に一万くらいは出せるよつて頑張りますよ」

がつくつとうなだれる花に、佳月はそれでも一年以上はかかるね」と上機嫌で微笑んだ。何をそんなに弾んだ声でこの男は言うのだろう、と思つたがもうそこを指摘するのも疲れていた彼女は、ははは、と弓を繋つた顔で笑い返したのであった。

第三話「お人よしのやの所以」（後書き）

連載早々申し訳ありません…ちょっと体調を崩しておりました；長ともちよつと短いものが続いております。「めんなさい。

第四話「近寄ったのは君か私が」

空き缶がいくつか散乱する部屋にて、響くふたつの声がある。ワンルームのさほど広くはない部屋の真ん中に、折りたたみ式の卓を囲んでは手作りであろう並んだ品々をつつく女性ふたりは、見た目から受けれる雰囲気は大分様子が違う。

一方は控えめな茶のショートボブ、一方は真っ黒な髪をくるん、と巻いている。

真夜中なのであまりうるさくは出来ないが、それでも盛り上がりてしまつとついつい音量が上がつてしまつようだ。

鈴を転がすような笑い声と、苦しそうな呻き声。相反する声の主たちはしかしじちらも明るい表情をしているのは変わりなかつた。

「それで、結局は相手の要求呑んじゃつたんだ、馬鹿だねえ」

ひとしきり笑いがおさまれば、火照った頬をおさえながらはあ、と息を吐く女性は、花の昔からの幼馴染である宮部環みやべたまきだ。

環とは小学生からの付き合いだが、高校が別々になつたふたりが程近い距離の大学を受験したのは、本当に偶然だつた。

花と同じように実家を出て一人暮らしをしている環は、時折こうしてふらりと遊びにやつてくる。環の部屋は花の最寄り駅から三駅先で、どちらかといえば花があちらにいくよりも今日のような機会のが多かつた。

というのも、環はなかなかどうして自炊をしないので、遊びに行つても物がなにもないのだ。

料理というよりも食に対しても貪欲である花は、手間を惜しんで食べる事を省略するような行為はしない。一人暮らしである花の部屋の冷蔵庫は、一通りの食材と調味料が並んでいた。

今日も、並んでいる料理の数々は、すべて花の手作りである。

田の前にある軟骨の唐揚げをついついて、花は口を尖らせた。

「だつて仕方ないじゃん。返品しても売り物にならないってことは結局、無料で進呈されたのと似たようなものだし。欲しこそ思つたのは事実だし。だつたら買つてもいいかなあつて」

「だからつてあんたに支払い義務はないでしょ。確かに怪しい男ではあるけど貰うつていう選択はしなくとも勝手に突つ返しとけば良かつたんじやないの？ 売り物にならないなんて知つたこっちゃないし」

もつともすぎる意見に、花はまたも呻き声をあげる。この友人を前にすると、花はいつも自分のしつかりしている部分などまやかしこでしかないと思えてくるのだ。生活力があるとか、ひとから良くな相談を受けるとか、そういうことではない。結局、いちばん大事なのは危ない橋をいかにうまく避けられるかで、花は自身にその能力が著しく欠如していることに薄々気付きはじめていた。

薄々、といつところがまた、相変わらずのおめでたさはあるが。

「……まあでもいいってことよ」

「ふうん？……ま、あんたがいいならいいけど」

「うん、まあ、危ないっても人間的にってことではないから」

言つて、ちびりと発泡酒を一口飲んだ花に、環は嫌な笑いを向ける。その表情にぎくり、と肩を強張らせたが、環はそんな反応に構うことなく新しいおもちゃを見つけたようにからかいの視線を花に向けた。

「なるほど。男として危険人物なわけだ？」

「…………」

「見た目そーんなにかつこいいわけ？ 雰囲気が妙に色っぽいとか？」

「…………」

環の言葉に黙秘を貫く花を、ますます面白がりながらも、何を思ったのか途端にこうと態度を変えると、ぐこっと缶の中身を飲み干した。

「そろそろ眠くなつてきちゃつたし、もう寝ない？」

「な、何急に」

『惑う花をよみがへ、環は散らばつた空き缶をひとつとめはじめる。

「別になんも。洗い物やつちやつていい？」

「……ありがと」

訝りながらも、害はないと判断したのか、花は一応お礼を言つて『ミニ袋を取りに台所へと向かった。

これも暗黙の了解というやつで、毎回、花が料理を作るかわりに環は後始末を引き受けている。がらがらと空き缶を放り込む環の顔をながめても、花は結局その真意がわからなかつた。

朝の爽やかな光が差し込む中、不快感に眉根を寄せた花は、睡眠を邪魔する存在を退けようと左手をあおいだ。しかし空間には何も行き当たる事無く、空を切つた音が耳に届いて、花はますます眉根を寄せる。

そんな花の様子をおかしそうにみつめては、環は容赦なく彼女の掛け布団をひつぺがした。

「花、朝だよー！」

「！？ ちよ、どうこう」と

あまりの出来事に田を丸くする花を、環はささやく、と睨みつける。

「なに、私があんた起こしたらいけないわけ?」

「だって普段なら私が起こさないと起きないでしょ!」

「いいから起きろ」

有無を言わさない迫力にぶつぶつと文句を言いつつも花はベッドから身体を起こした。

いつの間にか折りたたんだはずの卓が用意されていて、花はそれにも田をまるくする。

朝食を作るか、との問いに、環は首を振る。花も同様に昨日の酒が残っているようでどうにも胃がもやもやしていた。

味噌汁だけならば飲むか、と訊けばそれにはうなづくので、花はインスタントのそれをマグカップに注ぐためやかんを火にかける。その様子をながめつつ、環は頬杖をついて窓の外へと視線をやつた。

「どうか行きたいの?」

「……またしあうが入れてゐる」
ことん、と田の前に置かれたマグカップと、向かい側に座る花を交互にながめて、環は無言で味噌汁をすする。

舌についた無視できよつがないその独特な味わいに、環は片眉をあげた。花はそれをみて少し溜飲が下がる思いがすれば、ふむ、と少し考えてにつこりと微笑んだ。

「一日酔いには効く、かもしない」

「やうやつて不確定要素でなんとなくやるんだから」

「出たよ、理系」

「ひみつ」

理系と揶揄されると機嫌が悪くなる環にあえてその言葉を用い、花はマグカップの中身を飲み干す。台所のシンクにそれを置けば、身支度をしようと洗面台へ向かった。

花の様子をのんびりながめている環は、もうすでに一通りの準備を済ませている。

「……で、どこに行くのさ」

着替えが終わって軽く化粧を施している花の質問に、環は無言でにんまりと笑んだ。

「あれえ、花ちゃん。今日はお友達もいっしょなんだねえ」

ここにひと笑う男を見て、花は頭を抱える。そもそもが昨日の時点での可能性を考えなかつた自分がいけないのだ。突如豹変した幼馴染の態度を、その意味を見抜けなかつた花が負けたということだろう。

頭痛を覚えながら苦悶の表情をする花をよそに、隣に立つ環は興味深そうに佳月をながめていた。

「どうもお、こんにちはあ。花の友人で宮部環といいます
「どうも、橘です」

微笑む佳月に、環は普段の彼女らしからぬ弾んだ声をあげる。

それを見て胡散臭そうに花は環を見やるが、見られてる本人はま

るで気にしていない様子で、ビニールの飢えた獣のよつに佳月に食らいつかんとしていた。

「橘さんて、恋人いらっしゃるんですか?」

「いいえ」

「ええー、女性がほつておかなそうなのにー。」

「あはは、ありがとうございます。親しくお付き合いでいる女性はいますよ」

その言葉に、環のみならず、花もびくり、と反応した。

余程鈍い人間でなければ、今の発言の真意はそう考えなくともわかる。暗に特定の女はいないが、それなりに大人のつきあいをしている女性は居る、と言っているのだろう。

一步下がった花を環は横目で見れば、愛想の限りを尽くした微笑を浮かべて佳月の腕を取った。

「じゃあ、私もその親しいお友達の中に入れてくれたりします?」

環の言葉に目を剥きながらも、どこか興味深くその様子をながめている花に、佳月はちらり、と田線をやる。

その双眸に花は一瞬身を竦めたが、すぐに佳月がその視線を逸らした。そしてまた環に向き直ると、佳月も環に負けない微笑を浮かべた。

「もちろんですよ。あなたが私の友人になる事を望んでくれるなら」

言つて、佳月は環に掴まれた腕をそっと外すと、懐から名刺を取り出して環に渡しつつ再度微笑んだ。

環はそれに呆れ氣味にため息を吐くと、左手におさまった四角い紙を見る。書かれているのは店名と、おそらく店の番号、それに何

故か携帯電話らしき番号まで書かれていた。

花は、警戒心を剥き出したじつは佳月をみつめている。佳月は、その視線を楽しそうに受け止めていた。

「……橘さん」

環の今までとは打って変わった静かな声に、佳月は花に向けていた視線を環へと戻す。そして小さく首を傾げた。

「あなた、花をどうしたいんですか？」

ある種、確信といえなくもないその言葉に、花はついに固まった。そんな彼女へと顔を向けながら、佳月は顎に手をやると、つーん、と小さく声をあげた。次に続く言葉を捲していくようだ。

「……どうなんだろうね？」

飛び出した言葉はあまりにも予想外で、花だけではなく環も驚きに目を見開いている。そんな様子のふたりをまるで気にする事なく、佳月は花をみつめたまま発言を続けた。

「とりあえず、花ちゃんには携帯番号は教えないかな

意外な言葉に一瞬警戒心を解きそうになつた花は、しかしぬるべく言ひ出すことになる。

「あ、でも花ちゃんの番号は知りたい
「意味がわかりませんから！」

ずび、とツツ「ミミを入れた花に、佳月はからからとおかしそうに

笑う。

「俺もこれよくわかんないもん。でも会いたいし」

「なんなんですか、その手前勝手な発言はあー」

「あはははー、花ちゃん顔真つ赤でかわいいなあ」

「本気だとしたらアナタたちが悪すぎますよー」

「だつて花ちゃんと会つておしゃべりするの楽しいんだもーん」

開き直つたかのように発言を続ける佳月に、花はとうとうがくり、
とうなだれると次にはため息をひとつ落とした。

「……まあ、いいですよ。警戒する必要はないんだつてわかりまし
たから」「え？」

花の発した言葉に、佳月がわからないといつぱり首を傾げる。
花はそれに多少苛立つたのか、眉間に皺を寄せてだから、と続けた。

「私のことを女として見てないつてことでしょ？」

「は？」

「は？つて、なんですか、は？つて」

「……花、あんたそれ本気で言つてるの？」

ぽかん、と間抜けな顔をする佳月と、同じよつて信じられないものを見るかのように花をみつめる環に、花はわけがわからずには立つた。

「本気も何も間違つてないはずでしょ」

不機嫌顔で花がそう放てば、呆れた顔で佳月に環が声をかける。

それを受けた佳月は楽しそうに微笑んだ。

「…………橘さん、いいんですか？」

「うん、しばらくは都合が良いかなあ」

ふたりのやりとりに今度は花が疑問符を浮かべながらも、しかしそれ以上何かを追及することはしなかった。

ある程度の話をして気が済んだのか、環はアルバイトがあるから帰る、と花に別れを告げた。花も同じ理由から月見堂をあとにしたが、別れ際に「あのひとは厄介かもよ」と環から言われた意味がわからず、花は仕事中も悩むはめになってしまった。

環と月見堂を訪れた二日後、朝のアルバイトを済ませ月見堂を訪れると、いつものように佳月が店の中ほどにあるパイプ椅子に座っていた。その膝には猫がちょこん、とのっており、花は目を丸くする。

「こんなにちは。…………橘さん、猫飼つてたんですか？」

「ああ、花ちゃん、こんなにちは。いや？ついさつきふらりとやつてきたんだよ」

「へえ……毛並みも綺麗だし、どこかで飼われてるんですね？」

少し毛足が短いその猫は、しなやかな体躯にきらきらとした灰色の毛並みを携えていた。瞳の色は青だ。おそらくロシアンブルーという種類の猫だと思われたが、花も佳月も猫には詳しくないようどちらかがその名を口にすることはなかつた。

「かわいいですねえ。…………しかし、こんな埃っぽい場所にいて大丈夫なんでしょうか？」

「…………花ちゃん、案外失礼だね」

「いや、初めてこの店來たときから思つてましたからね。後ろにも
ちょっとスペースあるみたいですが、そつちばんどなつてるんで
す?」

花がちらり、と扉で隔てられている店の奥へと視線をやれば、佳
月が同じようにそちらへと視線をやり、次には花を見つめるも、す
ぐさま視線を逸らした。

「……綺麗だよ?」

「なぜ田を逸り?」

花の言葉に田を泳がせる佳月に、ため息をひとつ落とせば花はつ
かつかと店の奥へ歩を進める。

「は、花ちゃん」

「」の間、お茶を飲ませてくれるって言つたじゃないですか

制止する声も気にせず、花は扉を開け放てば、そこには小さな水
道と、これまた小さな冷蔵庫、それにちやぶ台じきものがあった。
六畳ほどある和室には、確かにお茶を飲めるスペースがあるには
ある。

しかし水まわりも、ちやぶ台にも、一体いつからあつたのだ、と
いう洗い物やらじみやらが散乱しておい、とてもではないがくつろ
げる場所とは程遠かった。

花はめまいを覚えれば一歩よろめき、数秒固まつた後勢い良く後
ろを振り返つた。

「……橘さん」

「は、はー」

「掃除します! 掃除用具は!」

「え、えーと、ゼーにあったかなあ？」

「……つ家から持つてきますからー！」の際です、お店もむかし整理しました。

「ひましましょ！」

「えー！」

「別に配置が雑多になつてゐるのほーの際かまいませんから。たまつてる埃はどうにかしましょ！」

「……ほー」

引き攀つた笑いをする佳月に、逃げぢや駄目ですよーと花は凄みをきかせて言えば、佳月は背筋を伸ばしてうなずいたのだった。

すっかり掃除が終わつたのは、日も落ちた頃だつた。始めたのは昼前だつたのに、と花は腕時計を見てはづきざつする。

「花ちゃん、お疲れさまー！」

「あ、ありがとうござります！」

すっかり綺麗になつた店の奥で、佳月が淹れた日本茶を受け取る。手にしてこる湯飲みも、花がかなり頑張つて磨いたものだ。

一口飲むと、毎日飲んでいるものへの親しみと、それ以上の美味しさが花の口腔に広がる。

「……美味しい」

田を丸くする花に、佳月は優しく笑う。

「へへへえ、ちょっと奮発しちゃつた。ね、花ちゃんこのあと暇？」

同じじみてお茶を啜る佳月に、花は首を傾げる。

「？　はい、今日はもうなこなこですナビ……」

「それじゃ行こうか」

「え？ 行くつてどこ？」

「今日は俺のおじつ

「えつ」

「ここと微笑んで立ち上がった佳月に困惑していれば、佳月が

ぐい、と花の手を引っ張る。

慌てて靴を履きつづいていけば、佳月は後ろを振り返って再度微笑んだ。

「おおー、ここ初めて来ます。」

「え、ほんとに？ 花ちゃん」の辺りに住んでるつて言つてたから來た事あるのかと思つた

微笑む佳月と並んで入ったのは、街中にあるなんの変哲もないラーメン屋だった。

花は畏まった場所に連れて行かれたらどうしようかと思つていたが、こういつた場所でよかつたと心底ほつとする。おじつだと言われたが、ラーメンならばそこまで遠慮する必要もないだろう、と瞳を輝かせた。

お互に田舎のラーメンを注文する際、あ、と花が小さく声をあげる。佳月がそれに気付いてどうしたの？ と声をかければ、何かを言い辛そうに花が口もるが、やがて再度口を開いた。

「あ、あのつ」

「ん？」

「ぎょ、餃子も食べたらダメですか！」

握りこぶしをついて叫ぶ花に、佳月が固まる。

「あ、あの、やつぱ図々しかったですか……す、すいません、餃子は自分で払います！」

「あははははは！」

その言葉を放った瞬間、隣に座る佳月が大きな笑い声をあげた。花はそれにぎょっとして肩を竦めるが、恐る恐る隣に座る佳月へと声をかけた。

「あ、あのー……」

「すいません、しようとひとつと餃子ひとつ」

ひいひこと笑いをこらえながら佳月がカウンター越しに店主へと注文すると、店から大きな声で返答する声が聞こえる。
花はぽかん、と佳月の顔をみつめた。

「餃子くらいもしかりおこります」

「え、でも」

「何をそんな真剣な表情をしてたのかなって。もしかしたらこの店が嫌だったのかなあとと思った」

「ラーメン大好きです！」

力強くまたも握りこぶしを作つて花が言えば、佳月は良かつた、
と言つて微笑んだ。

その店で食べたラーメンも餃子もとても美味しくて、花はすっかりこの店が気に入った。

「いじらせてました」

「いええ、どういたしまして。元々お礼のつもりだつたから

「いやー、満腹です」

「本当、良い食べっぷりだったね」

くすぐすと笑う佳月と並んで、花は初夏の道を歩く。暑いくらい
だつた店内から出れば、外は涼しい風が吹いていた。髪をかすめる
それが気持ちよく、花は一瞬目を閉じる。

そうして開いた次には、なぜか花の左手を佳月が握っていた。花
は驚いて体を強張らせるが、それを気にすることもなく佳月は握っ
たその手を自身の口元へと持つていく。

「……指輪

「え」

低い艶やかな声に心臓が跳ね、花は質問する声がかされたのがわ
かる。内心情けないと思いつつも、平静を装つ余裕が今の彼女には
ない。

佳月の親指が、花の薬指を撫でる。花はそれに再度肩をびくり、
と震わせた。

「指輪、していないね

「え、あ、ああ……高価なものだと聞いてからは怖くて

「してくれないと、俺としては悲しいなあ」

「……もう自分で払うって決めたんだし、しようとは思ってますよ」

「ふうん、そつか、じゃあ

うなずいて、佳月は更に花の手を唇に近づけると、佳月の唇が、
花の左手に重なった。

小さなリップ音が、静かな夜道に響く。

「指輪を付けるときは、俺に付けさせてね

もううんこじー、と黙つて、花の左手をするり、と離した佳月の

顔は、もういつもの浮世離れした表情に戻つていた。

混乱して顔を真っ赤に染め上げる花は、その意味もわからず、何を言つてるんですか！と怒鳴るのがせいいっぱいだ。

月が照らす初夏の夜。出会つて間もないふたりの距離が、少しだけ縮んだ瞬間であった。

第五話「その混乱は果たして」

「なんだかんだ、すっかり店内も綺麗になつたねえ」「物の配置は変えてないから、やつぱり埃落とすだけでも違いますね」

ほわん、とした口調で言つ佳月に、ふむ、と確かに口調でうなずいたのは花だ。

あの大掃除から三日が過ぎ、あのときよりも更に綺麗になつた月見堂に花と佳月は立つてゐる。

今は、はたきを右手に掲げながら店内のちょっととした汚れをぱたぱたと落としている花を、佳月が楽しそうにながめている。佳月も今日は仕事をする氣があるのか、珍しく本棚の整理をしていく最中だった。

元々が掃除魔というわけでもないが、花はこの独特な店の雰囲気をすいぶん気に入つていていたのだと今更ながらに痛感していた。でなければわざわざ半日をかけての大掃除などするはずもないし、今なおこんな真似をすることもなかつたろう。

面倒見が良いとはいっても、元来みずから足を踏み入れる事が彼女は苦手なのだ。

「あ、これこれ。ダメだよー」

はたきで低い位置の棚などを掃除していると、すっかり花と共に店の常連になつたロシアンブルーの美猫は、んにゃんにゃと猫らしい声をだし、前足を前後左右にぱたつかせながら花めがけてやってくる。

彼女にとつて、はたきは気に入りのおもちゃであるらしく、灰色の雌猫は今日も今日とてその本能のままに花の手指に生傷をこさえ

ていつた。

「うひうひ、あまりおでんばだといけないよ」

虫干しする本などを選別し、店の前に広げた新聞紙に並べる作業をしていた佳月は困ったように笑いながら灰色猫をひょい、と抱き上げた。

猫はそれが不満であるらしく、ふざめや、と佳月へ抗議の声をあげれば彼の懐でじたばたと暴れてくる。

「ほひ、せつかくおまえは綺麗なんだから、そんな顔をしないで

「ほひよと佳月が首まわりを撫でてやれば、数秒前の剣幕が嘘のようにロシアンブルーのその瞳をうつとつと細めて、彼女は彼にゆつたりと身をゆだねた。

花はその様子を見ては、おお、と感心の声をあげる。

「橋さん、お上手ですね」
「女の子はみんな好きだから」「いや、訊いてないですよ」「あはは」

呆れ顔で佳月をみつめる花を、彼は楽しそうにながめる。腕の中でうとうととした猫を見て佳月は微笑むと、今日はまだ座つていなかつたパイプ椅子へと腰を落とした。

「この子、やっぱり綺麗だから飼い猫なんでしょうナビ、首輪がないですよね」

「ひょっとしたら半野良なのかもしれないね。彼女自身が、完全に飼われるのを拒んでいるのかもしない

「はあ、なるほど」

それにしては人懐こいが、と胸中で花は思ったが、あえて言つことでもなかろうと言葉にはしなかつた。先程ひつかかれた箇所をながめでは、今日は傷が少なく済んだと新たな思考に移る。

もう既に断りなく店内奥の部屋へと侵入することを許されている花は、掃除を終えて扉を開けると、靴を脱いで段差になつている上へと足を踏み入れれば部屋の隅にはたきを立てかけた。

蛇口をひねつて水を出すと、手を洗う。傷口に染みない事もなかつたが、消毒や絆創膏をする程でもない。少しすれば治つてしまつだろう。花はそう判断したのかひとつうなずけばそのまま手をタオルで拭うだけで特になにかを施す事はしなかつた。

「…………」

ぴりり、とした手を見て、花はぼんやりと二日前の夜を反芻する。今日はあのときよりももう少し暑く、夜もきっともうたりとした空気が外を覆うことだらう。

あの夜、口付けられた左手の薬指は、まるで佳月の体温をそのまま移し込まれたかのように熱かった。いまだ燻つていいようなそれを思い出すと、花は途端にあの瞬間を脳裏に描いては頬を染めてしまう。

言われた事の意味を考えれば、それは特別なものを含んでいるのかいなか。本人に訊くにはあまりに躊躇われるそれを、ともすれば自意識過剰ともとれるその行為をする勇気は花にありはしなかつた。

「花ちゃん？」

意識を飛ばしていた花は、背後から声をかけられて大袈裟に驚い

てしまつ。さや、と短く悲鳴をあげて体を揺らせば、佳月はその反応に驚いて田を丸くした。

「どうしたの？」

「え、い、いえいえ」

「傷の手当でもしてゐるのかと思った」

「あ、別にたいしたことないですよ、すぐ治りますから」

曖昧に微笑んで段差のところで立ち止まると、花は靴を履こうと顔を地面に向ける。扉の前で花の様子をのぞいていた佳月は、そつと横へと体を移動した。

花が靴を履き終えて顔をあげると、先程横にあつたはずの佳月の顔が正面、しかもかなり間近にあつて花は思わず身を一歩退こうとしたが、すぐ後ろが扉であるためそれはかなわない。

田を見開いて固まる花に、佳月は真剣な表情をむける。

「……手、ひつかかれたの右？」

「え、いやあの」

「ああ、左か」

はたきを持つ手は右だが、いつも猫を退けようと左手で防御するため、結局実質的に被害を被るのはいつも左手なのだ。

なんでもないことのように花の両手を自身のそれで包み込んで持ち上げては検分を始める佳月に、花はどうしたつて狼狽してしまう。

男性に全く免疫がないわけではない。男友達は少なくないし、触れ合いもないわけではない。

ただ、女性として扱われるのは極端に慣れない。ということは結局、免疫がないのと同じ事なのだろうか、とどうでもいいことを頭の中で考えていたが、花はあることに気が付けばあれ、と声をあげる。

「猫ちゃんは？」

「花ちゃんが奥にいる間にふらつとビバへ消えていったよ。わざとお腹がすいたんだもん」

佳月の言葉に、そういうえばもつ毎時なのだ、と花はほんやり考える。今日は午後から講義がある為お昼を学食のいちばん安いメニューで済ませうと思っていた花は、そろそろ行かなくては、となんとか鈍い頭を正常運転に切り替えようと努める。

「あの、私それを大学へ」

「……わづへ？」

無言でうなずく花をちらり、と見ただけで佳月は素直に握っていた花の手を離した。

安堵の息を吐いて花が手をひとつこめれば、それを見た佳月は彼女に気付かれなによつにくすり、と小さく笑んだ。

店内の隅に置いておいた鞄を手に取り花が振り向くと、何かに気付いたように佳月へと声をかける。

「そうだ、橘さん。これ、今月の分渡しておきますね」

「うわ」と鞄の中から探り当てられた銀行封筒。中身を察して、佳月は花が差し出したそれをみつめては目を丸くする。

「……本当に払つつもりなんだ」

面食らつたように小さく呟いた佳月に、花は片眉を上げて抗議の視線を向ける。それに気付けば、佳月は苦笑でもって花の不満に応えた。

「それじゃあ、確かに」

「中身を確認したら、ここにサインしておこなへださー」

鞆から取り出された紙には、花の文字で金額と払った日時が記載してある。ボールペンを片手にそれを佳月に渡した花を見て、佳月は複雑な表情で微笑んだ。

「花ちゃんは変なところでしつかりしてるね」

「こういう事はきちんとしておきませんと。あとあとこう払つかで揉めたら大変です」

「俺はそんな事で揉めたりしないよ。まあ、期限を延ばしたくて誤魔化すことはしたかもしれないけれど」

「はいはー」

悪戯っぽく笑いながら書面にサインをする佳月の言葉を花はまつたく信じる事なく、呆れながらその様子を見守った。

きりんと彼のサインが入ったそれを見届けると花はファイルして鞆にしまった。よし、とひとつうなづく。

「じゃあ、明日は学校とアルバイトが立て込んでますんで、また明日にでも顔出しますね」

「…………うん、また明日ね」

「橋さん？」

微笑む彼の顔が妙に儂げで、花は訝りながらも名前を呼ぶ。佳月は再度微笑むと、いつておいで、と花の頭を撫でた。

「で、結局お前は流されたままなんだ」「別に流されてるわけではない」

「面倒だからまあいいか、で大半を済ませてるんじゃねえの」

悩んで結局購入した105円のメロンパンを齧る花にお皿はそれだけなのか、と佐藤が問いかける。花は据わった目をそのままに作つて来たかつたが時間も気力もなかつた、と答えた。

あれこれと考えて、花は当分節制することに決めた。

花は思つたのだ。彼と長い間時を同じくすることは、危険極まりないのではないか、と。

男性として好きかと問われれば、現時点では一笑に付してしまえる。そういう心構えがある。

しかし、と花はここで思つ。なんとなくであるが、この先、男性としてではなくとも、たとえ兄のような存在であつたとしても、自身の中で存在が大きくなれば、花は自身が何某かの形で手痛いしつべがえしをくらひのではないかと、どこかそうほんやりと思うのだ。はつきりと言つてしまえばこれはなんら根拠がない。それでも彼から漂うあの厭世感。自分とは違う世界に身を置く人間なのだとどこか本能が彼女に警鐘を鳴らす。

花は結局、あの男が心情的には嫌いではないのだ。時折戯れのように花に女としての彼女を意識はさせるけれども、それだつてきっと彼の日常に過ぎない。花はもうすでに、自分を彼は女性として見ていないと結論を下していた。あれはもはや、彼の癖というか、あいさつみたいなもの、と決め付けている。

しかしだからこそ余計に、花は彼に対して居心地の良さを覚えている面がある。あの部屋で飲むお茶は美味しく楽しい。けれども近付きすぎていけないのではないか。そんな葛藤が彼女の中をぐるぐると駆け巡り、結果とにかく早く支払いを済ませてしまおう、と心に決めた。

もう既に親しくはなつてしまつているが、これ以上彼の新たに

面を知る前に、赤の他人に戻りたい。先程三日前の出来事を反芻したとき、花は心の中でそつとたく決意したのだった。

そこまで考え終えたところで、目の前の佐藤に視線をやる。

彼の言つことはかなり確信に近い。いつさいがつさいが面倒だから、早いうちに逃げ出してしまおう。要是そういうことなのだ。だからこそ指摘されてしまつて花は目の前の男を睨みつけてしまう。しかし佐藤はその視線の意味をどう解釈したのか、にやにやしながらそんな彼女を見やる。

「なーんかお前が男の事で照れてるの見れる口が来るとはなあ」

あさつてな佐藤の言葉に花が、はあ?と間抜けな声をあげれば、ますますそれが面白いのか、訳知り顔で佐藤はうんうんとうなずいた。

「そんな深くつゝこまいながら安心しろつて。まああのひと大変そうだけど、自分の気持ちに素直になつてみりやいいじやん」「言つている意味が」

「流されてるつてことは、嫌いじゃないつてことなんだし。てことはまあ、好きになる可能性だつて大いにあるわけだろ。まあ頑張れよ」

「機嫌な調子で言つ佐藤の発言は、しかしづれているはずなのに妙に花の心臓を跳ねさせる。途中、わざと言つているのではないか、と思つたが佐藤に限つてそれはなかろう、と呆れのため息をひとつ吐けば、佐藤はそれに悩むよなあ、とまたも楽しそうな声をあげる。当分片想いのままなのだろうな、と胸中で思つた花であったが、言わないで心に留めておく優しさへらには持ち合わせていた彼女であつた。

「こりつしゃいませー」

フライヤーのスイッチを押しながら、慌しく冷凍庫へと走る。

花は忙しさに田を白黒させながら、コピーをしてくれといつ密の指摘ににこやかに応えながらレジを抜け出した。

部活生がなだれこむと、店内は途端に賑々しい様子になる。野球部やらサッカー部やらと種類は色々だが、最低10人単位で大体が同じものを買って行く、という特徴は変わらない。

夏場は階、まるで決まり事のように50円の棒アイスを買っていくし、そりでなければ100円のからあげを買って行く。

志を同じくする者は趣味嗜好もやはり似るものか。そうでなくとも高校生男子の暗黙の了解なのか。串に刺された30本ほどのからあげを汗だくで揚げる同僚を見て、花はこの瞬間は毎度毎度、祭りのようだ、どこか現実逃避気味な事を考えていた。

歌の会だか俳句の会だかに所属している女性が、最後の楽譜のロビーを済ませて眉を顰める。文字色の濃さが気に入らないようであつたが、店内の喧騒に一応は気遣つてくれたのか渋々といった風情で原稿をしまつていった。

「ありがとうございました」

「ま、毎日コピーするならおぼえろよおばさん、と内心悪態を吐きつつも、笑顔で客を見送ると花は戦場と化したレジに急いで手助けに向かつ。

「お待ちのお客様、いらっしゃいレジへどうぞ。」

声を張り上げた花に、隣のレジにて高校生をさばいていた高田が彼女に微笑んだ。花も苦笑で返せば、ふたりは黙々と長蛇の列がなくなるまでひたすら数字の羅列とたたかっていくのだった。

「いやー、今日こつもよりすごかつたですねー。」

「なんか試合あつたみたいだね。見たことない高校の制服着た子達いたし」

「でもやつぱりみんな買つものは同じなんですね」

「そりゃあ、そりでしょ。ショーン店なんだから置いてあるもの同じだし田移りする」ともないだろうからね」

「つてことは全国共通なんですかねえ、あの買い方は」

「日本全般かはわからないけど、この区内では共通だと想つなあ」

売れた商品を補充しながらけらけら笑うふたりを、先輩バイトが声が大きい、とたしなめる。ふたりは肩をすくめて仕事に再度取り組むことにした。

高田は最寄り駅がここではないので帰りはいつも電車を利用している。そんな彼が駅前に用事があるという花に、いっしょに帰りましょうと提案して、ふたりは駅まで數十分の道のりを肩を並べて歩いていた。

「やついえば、例の指輪ってどんななんですか?」

ふと会話の中で言つた高田の言葉に、花はどうきつ、と心臓を跳ねる。

「用みたいな形のだよ。怖くてつけられないから田舎的になしてないけど」

「結局、返さない事にしたんですか?」

「ていうかお金を払う事にした」

「えつー買つんですか!?」

驚愕の声をあげるのも無理はない。なんせ18万の指輪なのだ。

学生がぽんと払える額では到底ない。

花は特段隠す必要性を感じなかつたので、こじしまでのこきあつを話した。隣で聞いている高田の顔がみるみる不機嫌になつていくのがわかつたが、疑問に思いつつもとりあえずは最後まで話し終える。歩道橋を渡りひと歩一歩上にのぼり、頂上にひとまます辿り着いたところで、高田はぴたり、と足を止めた。

「……なーんで先輩がそこまでしないことなんないわけ」

「いや、まあ、私もさあ、一回惚れじゃないけど気に入っちゃつたから」「えー？」

田を剥いて大声をあげる高田に首を傾げながらも、花が続きをの言葉を口にする。

「だつてなんか、妙にそそられる指輪でさ。私普段、宝石とか興味皆無なんだけどなんでかこれには惹かれてしうがなかつたんだよね」

「！　あ、ああ、指輪の話ですか」

「……あんた何と勘違いしたわけ？」

佐藤第一郎か、と心中で呟きつつ半眼になつて高田を見やれば、高田は誤魔化すようにあははは、と渴いた笑い声をあげる。それに半ば呆れながら、花は歩道橋の手摺りに背中をあずける。

高田もそれにならつて隣に並びつつ眼下の行き交う車をみつめから、横を向いていた体を花の正面に向き直すと花の顔へと視線を戻す。

「ますます気になるなあ。その指輪、いま持つてないんですか？」

「ん？　あるけど……」

「えーじゃあひょと見せてくださいな」

「こけど」と言つて花が鞄を漁る。取り出した巾着袋から花が恐る恐る指輪を出すやまを、高田は興味深げにまじまじとながめていた。落とさないよう手と手摺りから多少距離を取り、巾着袋を逆さにした。

手の平にのせる、と取り出してのせれば、これだよ、と花が高田にそっと左手を差し出す。高田はへえ、と声をあげてかなりの慎重さでもつてそれを持上げた。

「綺麗ですね。……でもこれが18万かあ」

「まあ骨董品だからねえ。古いのが価値があるって事なんぢゃない？」

私もよくはわかんないけど、と肩を竦める花に、山田さんらしいですねえ、と高田が笑う。

どういう意味なのだ、と問いただそうした次の瞬間、何を思ったのか高田が花の左手を取つて持ち上げた。

その仕草には覚えがある、と心臓を跳ねさせた花は、なぜか声を発することもできずに固まつた。高田はその反応に満足なのか、微笑んで彼女の手に優しく自身の右手を添えれば、左手に持つた指輪をゆつくりと花の薬指に近づけていく。

環が彼女の指をするつ、とぐぐると、彼女の左手薬指におさまった指輪が、本来の役割を『えられた喜びからなのか、爛々と輝いてみえる。

夕方の日が傾いたこの時間に、花と高田の影はぴったりと寄り添い合つていて、こんな場面で異性に左手をとられ指輪をはめられているのが、花はひどく恥ずかしいと思えばすぐさま高田から距離を取る。

「ちょ、なんで填めるの！」

「えー、いいじゃないですか。もう先輩のものなんだし堂々と付けて歩いたらいいんですよ。もったいないし宝の持ち腐れでしょ」

「それはそうだけど、そつじゃなく！」

「まあまあ。別に深い意味はありませんって。たまたま左手の薬指に付けたってだけですよ」

ぴったりですね、と笑いながら言う高田に、動搖した自分が恥ずかしいと思えば花は羞恥心で頬をみるみる染め上げていく。歩道橋の上というのもまた何か嫌だ、と花は心の中で言葉にする。まだまだ明るい夏の空では、彼女の表情は歴然で高田は思わずその反応に顔を綻ばせた。

再び花の左手を取れば、高田はふうん、と指輪をながめやつた。

「やつぱり人の手に填まるとまた印象が違いますね。いつしてみると確かに用っぽい。石の色もそつですけど、台座のまわりのデザイン、星っぽいですよね」

高田の指摘するように、少し錆びた金色の台座に彫られている細工は、どこか夜空に浮かぶ星を思わせる。その真ん中にぽっかりと満月が浮かんでいるような、まさしく月夜を思わせるような、デザインの指輪だ。花は、その不思議な魅力に惹かれて目が離せなかつたのだろうか。

「ねえ、トーロ。今日はどうするの？」

「君が行きたいところでこいよ」

花たちが歩いてきたのと同じ方向から人がやつてきて、花と高田は道を塞いでいる現状に少し慌てる。高田が軽く花の手をひいて端に寄れば、ふたりの様子を見た女性がくす、と視線をやって微笑ん

だ。しかし花が田で追つた先は、艶やかな栗色の髪をなびかせる綺麗な女性ではなく、その女性を引き連れている男のほうだった。

田を丸くしながら、心の中で男の名を呟く。

「可愛いわね、あの子達」

「……うん」

微笑んで女性の腰を抱く男性は、女にひけをとらないほどにやはり整った顔をしている。長すぎる前髪は些か邪魔そうであるが、それすらも魅力のひとつのように妖しい何かを放っていた。

凝視する花の視線に応えることもなく、綺麗な男女は歩道橋を確かに足取りで去つて行く。

「花さん！」

高田の声に、去つて行った先に視線をやって固まっていた花が覚醒する。返事をしようとして、ん？と眉根を寄せた。

「花さんってなに」

「前々から名前で呼びたかったんです。だめ？」

微笑んで首を傾げる高田に、別にいいけど、と奪われた左手を引き抜いて言えば高田は良かつた、と息を吐ぐ。

「……さつきの、花さんの知り合いで？」

「え、あ、ああまあ。女連れのには驚かなかつたんだけど

「？じゃあ何に驚いたなんですか

高田の言葉に頬をかきつつ、花は結局笑つて誤魔化した。私達も行こう、と先をうながす彼女を讶りつつも、高田は訊いても無駄だ

ひとつと追求することを諦める。

話題転換して談笑するも、花の頭には先程の女性の声が頭から離れない。

『トーゴ』

なぜ、あなたは、トーゴと呼ばれているのですか、「橘佳月」さん。

心の中でした彼への質問は、当たり前だが返答されることはなかった。

第六話「問うた答えがもたらすものは

駅前で高田と別れた花は、その足で近くのスーパーへと赴いた。元々の目的は食料品を買い込むことだったので予定通りの行動だ。眉根を寄せてレタスを選別するその様は、いかにも山になつているものからいちばん良いものを選別しようとしている人間にみえる。実際の彼女との齟齬を、しかし周囲は気付く事なくすり抜けていく。花はひとつため息を落としては、最初に手に取ったものをそのままかごに放り込んだ。店内奥へ進んで行くにつれ、買い物かごの中身はどんどん増えていくが、賞味期限も見ていくか怪しい迷いのない動きはやはり誰にも見咎められることなく花はそのままレジへ並んだ。

お金を支払い、商品を袋詰めし、買い物かごをもとあつた場所へ戻す。

「……高い」

眉根を寄せてレシートをみつめ、ぽつり、とひとつ呟いた。

無意識に済ませた買い物は、どうやら予定していた予算を超えてしまつたらしく、花は苛立ちながらレシートを財布にしまう。

半ばハッパ当たり気味に、心の中で男の顔を思い浮かべる。

橋というのは本名ではないのかもしれない。そう考えると先程の映像が頭に再生され、花は気になつて仕方なくなつてしまつ。

人並み的好奇心もあるのだから、それも当然だろうと言い聞かせてはいるが、それにしたつて気にしそぎではなかろうか、と花は自分に疑問を感じる。小さく頭を振つて、なんとか忘れようとしてもなかなか心から離れてはくれない。

その理由がどうしてもわからずには回田かのため息を済ませると、花は家に帰るべく重い足を引きずつた。

次の日、花は悩んだ。会ったときどんな顔をすればいいのかわからなかつたからだ。ひょっとしたら人違いということもあるが、双子の兄か弟でもいない限りそれは苦しい。なにも知らないふりをするのは可能であるが、果たしてそれでいいのかどうか。

今日に限つてアルバイトも学校も休みですることもなく、一日中悩むのも癪だと考えた花は、結局どう対峙するかも決めかねたまま自宅をあとにした。

寝不足の頭はずきずきと痛み、その寝不足である原因が橋佳月であるという事実にも苛立つてくる。

花は、なにに対してもそんなに衝撃を受けたのか、眠れぬ夜を過ごした今ならば薄々気付いていたものの、認めるのを拒んでいた。

それを受け入れてしまえば、いよいよ彼の存在は花にとつて大きくなりつつあると認めてしまつたことになるし、彼をある種慕つていると呟つてもしまえる。そうなつてはもう本能が警告しようがなにをしようが抗えない。

現時点でこつやつて悩む以上、もう花にとつて佳月の存在は無視できないものになつているのであるが、彼女はその点を特に気にしているらしかつた。というよりか、そこを気にする余裕が今の彼女にはないのである。

嘘をつかれていたかも知れない。彼女が眠れない原因はまさしくそれだつた。

自分を偽るということは、佳月が花を踏み込ませないよう予防線を張つたことと同義になる。どころか、彼女の存在を厭うてゐるかもしれないが、花はその事実に気付いて気落ちする身の内がわかつてしまつたのだ。

しかしそれを丸ごと認めるのは彼女にとつて非常に癪であり、非常に危険。であるから、今の花は周囲から見れば非常に馬鹿馬鹿しいといえなくもない状態でぐるぐるとたうちまわつてゐる。どこかの彼女の知人が、素直になれば良いじやん、とけろりとした顔と

声で言ふやうなものだ。

自身の心に蓋をする、といつ行為は、思いのほかストレスになる。無理が生じているのだから当然だ。わからないふりをしているということは、既にわかっているということと、結局は誰でもない自分を誤魔化しきることすらできないのだから、まさしく滑稽である。と、そんなよくなことに思考を沈み込まさせてしまったところで、花はまたも怒りの矛先を佳月へと向け始めていた。

『そもそもどっちなのよ、あの男はー。』

近付いてほしいのか、ほしくないのか。それを考えると、花の苛々はとまらない。自然乱暴な足取りで月見堂に向かっていたらしく、あれだけ悩んでいたのもどうでもいいと思える程に原因である佳月の顔が間抜けであつた為、花は途端に毒氣を抜かれた。

「花ちゃん、朝から何か嫌なことでもあつたの？」

いつものにこやかな笑顔はそこになく、パイプ椅子に腰かけたまま首を傾げる佳月に、花は脱力しては、いいえべつに、と答えるくらいしかできなかつた。

「……おはよひびきています」

「おはよう」

ため息混じりにいつものあいさつをすれば、佳月も回じようかと店の奥へ足を踏み入れる。

顔を上げて彼を横切り、せっかくだから掃除でもしようかと店の奥へ足を踏み入れる。

この当然のようにしている行為が、既にふたりがそれなりに親しくなつてしまつている関係を如実にあらわしているわけだが、花は

それについては気付いているのかいないのが、はたきを持って店内をぐるりと見回している。まあこの行為がなければ、いよいよ花はこの店でやる事もなくぼつと過いでいるのは苦痛になつていくわけなので、ひょっとすると田をつぶっているのかもしかなかつた。

「……ねえ、花ちゃん」

「なんですか」

いつものように天井のほう、といつても一番上は届くわけではないが、から埃を落としていくと、開いていたはずの本を閉じて佳月が花に話しかけてくる。

作業の手は止めずに返事をすれば、佳月からは続く言葉がない。疑問符を浮かべつつも、花は佳月のほうへ注意を向けることなく手を動かしていた。

それが気に入らなかつたのか、佳月は真っ直ぐに花をみつめていたが、その瞳が段々と怪しいものにかわっていく。半ば睨みつけているようなその表情に、背を向けている花は気付かない。

「！？ うわ

花が驚きの声をあげたのは、振り向いたすぐ傍に佳月がいたからだ。一步退こうとした花の右腕を佳月が掴めば、彼女が手にしていたはたきを取り上げてそこらへんに放つてしまう。

花がそれを目で追いかけて視線を佳月に戻すと、田の前の男は今や完全に花を睨みつけている。しかし視線の意味はまるで見当がつかず、花は情けない顔をしながら、橘さん？と名を呼んでみた。

「昨日の男、誰？」

「はあ？」

質問の意味がわからずに間の抜けた声を花が出せば、佳月はますます不機嫌顔になる。温厚な彼とは似ても似つかないその様子に多少戸惑いを覚えるものの、時折みせる子供っぽい仕草も知つてはいたので花はそこまで驚かなかつた。

しかし、やはり理由を察することはできないし、そもそも昨日の男という聞きなれない単語の意味もわからない。花はなんのことであろうか、と視線をさまよわせる。恐らく昨日、といつのは花が固まつて凝視してしまつた例のあの場面のことであろう。田下、彼女が悩んでいる原因である。

まさか佳月のほうからふられるとは思わず、その事にも驚いていた花であったが、今はとりあえず質問を消化するほうが先だ。そのときの事を反芻して、昨日の男の正体を突き止める。

「……ああ、ひょっとして高田君の事ですか？」

自分の言葉と、佳月に掴まれている右手を視界に入れた途端、その直前の出来事を思い出して、花は氣恥ずかしさに頬を赤らめる。佳月の一件が衝撃すぎてすっかり記憶の彼方だつたが、そういえば高田から人生二度目の異性から左手の薬指に指輪を填められる、とこう経験をしたのだ。

花は歩道橋の上の高田とのやり取りを思い出せば、自意識過剰な反応をしてしまつた自分が恥ずかしく、なんだか居た堪れない思いだつた。

花が頬を染めた瞬間を叩撃した佳月は、睨んでいた顔に眉間に皺を足せば、花の右手におさまる指輪を引き抜いた。

「あの男の子、花ちゃんの彼氏？」

「は？ なんで」

「だって指輪填めてもらつてたじやない。左手の薬指」

「ううつて、と騒いて、佳月は花の左手に指輪をおさめる。さすがに一度目、高田との行為をいれれば三度目のそれには花は何の感概も起こすことはない。

佳月にされたその行動の意味がわからず、ただ首を傾げた。

「別に彼氏じゃないんですけど」

「彼氏でもない男に指輪を填めてもらつたの？」

「橘さんだって同じ事したじゃないですか」

「俺はプレゼントした人間なんだから当たり前でしょ」

そういうものなのか？とますます疑問符を浮かべる花だが、とりあえず逆らつのは得策ではないと思えば、とりあえず、そうですね、と彼の言葉を肯定した。

「俺以外の男からこの指輪を填めてもらつちゃ駄目だよ」

「……はあ、すみません？」

「次同じことしたらお仕置きだからね、わかった？」

「……はあ、わかりました」

いまいちわかつていない、なんとも気の抜けた返事をする花であつたが、それでも佳月は多少満足したのか、花の手を離すといつもと同じように微笑んだ。

結局ほほ佳月の発言の意味がわからないまま、花は椅子に戻る佳月をながめていたが、今のタイミングならば訊けるかもしれないと思えば、橘さん、と彼の名を呼んでいた。

「なあに？」

花の言葉に歩を止めて振り向く佳月に、花は「へへ」と唾を飲み込む。

「トーハつじ、橘さんの本名ですか？」

「違うよ」

「そうなんで、ってえつー？」

なんの躊躇いもない即答にすつとんきょうな声をあげた花は、答えてくれないかもしくは肯定の意である返答しか予想しておらず、予想外のそれに驚愕するしかない。

花の大声に目を丸くする佳月に、胸中で、いや驚いてるのはこっちです、と花はつづけますにいられなかつた。

「名前を呼ばれたくないんだ」

『えい』、といふ音がして、意識を飛ばした花は覚醒する。見れば佳月はパイプ椅子に腰を下ろしていた。花は彼の表情を確認するようになみつめる。笑つてはいるが、田はだに寂しそうだ。

「でも、名無しだと不便でしょ？だから女の子達に訊かれたらトーゴだよ、って言つの」

「じゃあ、橘さんも仮名なんですね」

花の言葉に、佳月は再度目を丸くして首を傾げる。まるで、何故そんなことを訊くんだ、と言つていいと思うよつじ。

「橋佳月は、俺の本名だよ」

「えー？」

「花ちやんは俺の名前の意味知ってるよね

「？　はい」

前に、佳月の名前は満月とこう意味がある、とこうよづな会話を

した事を思い出しても、花はうなずく。それに佳月もうなずいて微笑めば、花の心臓はなぜか跳ねた。

「だからアーテーなの。ほら、満月って十五夜でしょ。十五だから十
に五でトーハー」

「ああ、なるほど。……って待つてください」

「ん？」

ぱん、と謎が解けたといつよつに手と手を打ち鳴らした花であつたが、次なる疑問が浮かぶ。それをまた抱えて悶々とするのは嫌なので、間髪いれずに訊いてしまおうと花はまつたをかけた。
佳月は、花の次の言葉を促すように首を傾げて花と目を合わせる。花はそれを真っ直ぐに受け止め口を開いた。

「なんで私に本名を教えたんです?」
「呼ばれたいからだよ」

さり、と答えられたそれに花はなんとなく歯軋りしたい思いで、小さく呻り声をあげる。頬が赤くなつていなかと怖がる自分のその思考が嫌で、花は眉根を寄せながら次の言葉を口にした。

「……矛盾してませんか」
「してない」
「だって、呼ばれたくないんでしょ?」
「女の子達にはね」

佳月の言葉に花は片眉をあげれば、少し面白くなさがつた声をあげる。

「生物学的には私は女なんですけど」

「違ひな」

「はい?」

「花ちゃんは花ちゃんでしょ!~山田花」

「……そりやそうですけど」

「俺は、女の子達には呼ばれたくないけど、花ちゃんには呼ばれた
いの」

意味深い言葉の数々に、花はどう反応すれば良いのかわからず固
まつた。じゅうた言葉遊びは苦手で、その意味を考えるのも頭が
痛くなる。花はいつものように面倒、と片付けてしまっていい項目
のもののかを考えてみたが、どう頑張ってみても面倒臭いからい
いや、と捨て置いてしまえるものではなかろ~、とおめでたい彼女
の脳みそでもそう結論を出すほかなかった。

「昨夜の女性とは、その、お付き合いでしているわけではないんで
すか?」

「してこるけど」

「……恋人なのに本名を教えないんですか?」

「お付き合いはしているけど恋人じゃないよ」

「意味がわかりません」

「色々なところに付き合っているし、夜も一緒にいるけれど、恋人じ
やないよ」

佳月の回答に玲央がいった花は、ついに苛立つたのか顔を真っ赤
にして声を張り上げた。

「紛らわしい言い方をするな!」

「あははは」

「あははじゃありません!~別に橘さんの人生ですから良いんですけど、
いつか刺されても知りませんよ!~」

「そういうんじゃないから大丈夫だよ」
「もうほんつとうに意味不明！」

憤慨する花を笑う佳月に、花は何故自分には名を呼んでほしいのか、と問おうとも思つたが、あまりにも核心を突きすぎる気がして、花は結局それを訊くのをやめてしまった。

どういった意味であつても、しつぺがえしの領域に入つてしまいそうな気がして、それならば無知で鈍い女のままでいたい、と花は願つてしまつたのだ。

第七話「見え隠れする感情」

路地裏の小道に位置する月見堂は、その外観も背景も穏やかとか言いようがなかつた。朝方に訪れれば柔らかな日差しが昔さながらの店を優しく包み込み、後ろの細い細い道からは、今にも猫が飛び出してきそうである。実際、月見堂には通い猫がいるわけであるが。

ともかくにも、ゆつたりとした時間が流れるその場所で、山田花は何故か実に落ち着かない数日を過ごした。

月見堂の店主である橘佳月は、その店そのものと言つていい常人よりも遅い時空で生きているような人間だ。微笑みもいかにも無害そうな優しいものである。

しかし花は、その微笑を警戒し、その男そのものを警戒し、店に近寄りたくないと言え願つた。

彼女の読みは見事に当たり、どうも厄介な男であるとわかつた現在。佳月という男の輪郭がやつとぼんやり見えてきた昨今、月見堂に赴いても特に何かが起こる事もなくなってきた。

花はやつと落ち着きを取り戻そうとしている。

元々、趣は嫌いではなかつたし、佳月が猫を愛する姿もどこか落ち着く。何もなれば、花の佳月に対しても抱く感情は好意的だ。

気付けば初夏だったはずがじりじりと本格的な夏の訪れを感じるようになり、花は月見堂に顔を出すようになつてからもう一ヶ月弱程の時間が経過したのだと気が付いた。

「夏つて嫌ですねえ」

花の呟きに、佳月はおや、と目を丸くする。

この月見堂にはもちろん冷房などという文明の機器はなく、花と佳月は店の売り物であつた和紙で出来ていてうちわを片手に涼を繕

つていた。

「意外だね。若い子つてみんな夏が好きなものだと思つていたけれど」

「暑くて苦手なんですよ。泳ぐのとかもそんなに好きじゃないし…あ、お祭りは嫌いではないんですけど。そういう橘さんはおいくつかんですか？」

「26歳」

さり、と答えられてしまった事に、今度は花が目を丸くする。しかし、と花はそこでいつたん思考へと身を沈めた。反芻してみれば、彼は花の質問に言い淀んだ事などほんなく、彼女が訊けば大抵はきちんと回答してくれていた。花はそれを思い出してはそうか、とひとりうなずく。

その様子が可愛らしいと感じたのか、空気を揺らじて佳月が微笑んだ。

「じゃあ、今年で27になるんですか？」

「いや、5月生まれだから。花ちゃんは？」

「私は21です」

「花ちゃんて大学何年生？」

「三年ですけど」

「じゃあ花ちゃんも誕生日早いんだね、いつ？」

「……いいじゃないですか、別に」

言ひ淀む花に、佳月は悪戯っぽい表情で笑めば、うちわを扇ぐ手を止める。立ち上がる佳月を予測していたかのように猫が彼の膝から下り立ち、その数秒後にパイプ椅子から腰を上げた佳月は、含んだ笑顔のまま花へと近づく。

花はその様子に一步退けば引き攣ったような笑みをみせる。お互

いに浮かべている表情は「笑顔」という言葉でありながら、その中身はまるで違う。人間というものは、複雑なものだ。

そんな複雑な様相を呈しながら、ふたりの距離はじりじりと縮み、花は棚を背につつかえ、追いつめた佳月はますます笑みを深くする。

「ねえ、花ちゃん？」

「……なんでしょう」「ひょ

「また俺が花ちゃんに何かあげるとか思つてる?」

「だって、橘さんてひとに物をあげるの趣味なんじやないんですか！」？

もはや数センチの距離にまで迫る佳月の顔を直視することが花は出来ず、思い切り目を逸らしながら泣きたいような思いで叫んだ。佳月はその様子がおかしいと思えばくつ、どこか酷薄な忍び笑いをもらした。

「花ちゃんは、わ」

静かな、いつもどおりか違つた声のトーンに、花は体を強張らせる。それを無表情に見ながら、佳月は花の顔横にと、と手をついた。

「俺のこと、何者だと想つてる?」

「……え?」

「俺は、なんだと思つ?」

半ばパニックになりかけた花は、冷静を取り戻すことなく彼の質問の意味を考える。とにかく答えなければ、と氣ばかりが急いで、咀嚼する間もおくことなく叫んだ。

「橘さんは、ただの変態です！」

震える声音で響いた花の言葉の後、月見堂が立つ小道はいつもの静寂を取り戻していた。

迫る佳月の動きが止まつたことを不思議に思いながら、花はいつの間にか固く閉じていた目を恐る恐る開く。

「た、橘、さん？」

小さく咳いて花が佳月の顔をつかがうと、次の瞬間、佳月が大声を上げて笑いだした。ついにはこらえきれないといわんばかりに壁をばんばんとたたき出す。驚きに花が固まっていると、いまだ抜け切らない笑いに肩を揺らしながら、佳月は小さく「めん」と呟いた。

「花ちゃんて、いいなあ」

お茶飲もう、と言つて、そのまま佳月は奥に引っ込む。

花はそれに畳然としながら、本当に彼といつ人間はわからない、と心底感じたのであった。

「おはようございます」

出勤するとい、レジから同じよにあいさつの声がきこえる。花は視線をやるとメンバーの中に高田も含まれていた。平日の昼はやはり主婦層の人々がシフトに入る事が多い。

パートのおばさん、と呼ぶにはまだまだ若い同僚達に改めて挨拶を交わしながら、高田へと視線をやつた。

「珍しいね、今日は中番なの？」

「どうしても出ないとまずい授業とかぶつかったから交代してくれつて言われたんですよ」

少しむづつとした口調でやつぱり高田は、花はひとりの人物を思い浮かべて苦笑をもらした。

「ああ、すえつぐ末次君？」

「あいつしょっちゅうそんながら困りますよー。」

「まあ、一応他の日と交換でだからいいじゃない」

「それさえしなかつたら人格を疑います」

「あはは。じゃあ私着替えてくるねー」

笑いながら花がバックヤードへと向かおうとすれば、高田が後ろから声をかけてくる。不思議に思つてふりむけば高田が小さく首を傾げた。

「花さん、金曜日はバイト?」

「金曜日? うん、中番」

「じゃあ夕方あがりか…次の日は?」

「休みだよ」

「じゃあ金曜、仕事の後なにか予定あります?」

「んー、まあ、予定つて程じゃあないけど」

花は月見堂に寄るのがもはや日課のようになつていて、あえてそれを言葉にはしなかつた。

その彼女の言葉にぴくり、と反応した高田は、片眉をあげて次の言葉をうながす。

「なにがあるの?」

「？ 用見堂に行くんだけど……なに、なんで睨むの」

「……けっこう頻繁に行つてるんだ？」

「え、ああ、まあ……」

上から見下ろすように睨まれるのは、身長があまり高くない花にとつてけっこうな恐怖になる。後輩になぜびくつかねばならん、と心中で咳きつつも、口にはできない花は自身を情けなく感じた。そんな花の様子をわかっているのかいなか、小さく息を吐いて剣呑な雰囲気をとりあえずおさめた高田は、わかりました、と続きを話す。

「実は花さんに相談があつて、金曜日に飲みとかどうかな、と思つてたんだけどダメですか？」

「ん？ かまわないけど。相談つてふたりで？ 何、どうしたの。なんなら今日電話しようか？」

ふたりきりで話がしたいとこつ後輩を前に、花は先程の恐怖を忘れれば心配気に眉を顰める。高田はその様子に小さく笑えば、ゆるゆると首を振つた。

「いえ、そこまで切羽詰つているわけじゃないから大丈夫です。じゃあ、その日いつしょに用見堂行つてもいい？ 実際に会つてみたい」「ん？ いいけど。じゃあ、あがる時間にこじで待ち合わせにしようか。どうせ駅からよりここからのが近いし」

「そうですね。そうしましょ！」

うなずいて微笑み合つふたりに、同僚達は怪しいと勘織つていたが否定するのも面倒なので花はそのまま捨て置いた。

心なしか嬉しそうな高田に首を傾げながら、今度こそ花は着替えにバックヤードへと消えていった。

週末ということもあって、金曜日というのは忙しい。飲食店でもないのになぜコンビニのような店も混むのだろうか、と花はこのアルバイトに就いてから時折考えるが、やはり週末に家でちょっとしたご褒美を食したい、という庶民のささやかな楽しみなのだろうか、と面白くもなんともない無難な結論をくだしていた。

他のアルバイトに訊いても答えは似たようなものなので、花はそれ以上真剣にこの事について考えようという気概は持たなかつた。

「お疲れさまです花さん」

言われて差し出されたのは、花が好んでよく飲んでいるプラスチックカップ型のココアだった。

仕事が終わりバックヤードで着替えている間に、高田が気を利かせて買つてくれたらしい。花は目を丸くして次には微笑めば、素直に礼を言つて受け取つた。

同僚どころか店長にも嫌な笑いを向けられそうな気配を察すれば、花は高田の背中を押して早く出よう、と急かす。高田はその様子におかしそうに笑いながらも、おとなしく花の対応に従つた。

「やつぱりさー、お礼も過ぎると迷惑つてものだよね」

「なんですか急に
「んー」

店を出て並んで歩き出せば、花が急にそんな事を呟いたので、高田はくすくすと笑つて彼女を見る。花はそんな高田に生返事をしつカップにくつついていたストローを外すと、次には蓋にぶす、と突き刺した。

すずす、とストローからココアを吸い込みつつ、花はカップを持つていいない左手を視界に入れる。口に広がる味は慣れ親しんだもの

で、疲れた体に甘いものはとてもありがたい。花はこのくらいの得意ならば素直に受け取る事ができるのに、とまた蒸し返しそうになつた色々な場面をなんとか振り切つてため息を吐いた。

「だつてさあ、18万だよ」

「ああ、そのこと。俺の158円と比べますか」

苦笑する高田に花は最後の一滴を惜しむかのようにずず、と音を立てた。行儀が悪いとわかつていつつも、音を立てるまで飲んでしまう。花にとってこれはそういう存在の飲み物なのだ。

飲み終えて、たまたま通りかかったやはりコンビニエンスストアに、悪いと思いつつ飲み終わつたそれを外付けのゴミ箱に放つた。自身がアルバイトをしていると、どうしてもその店のものではない「ゴミ」をそこに捨てるのは劣悪な気が花はしてしまう。それを苦笑交じりに高田に伝えてみれば、高田も似たような感覚をもつたことは何度かある、と答えた。

「じつは今までした。だからさ、じつのが単純に嬉しいっていうか。しかも赤の他人からなんて怖いだけじゃない？」

「ああ、まあ。そうですねえ……特に指輪なんて、それこそ好きな相手じゃなければ迷惑なだけだろうし」

「やうやく」

ため息を再度吐きながら、花はじつちと告げて道を指し示す。佐藤の時と同じように、こんなところに店があるのか、と田を丸くしていた。

「こんばんはー」

「こんばんは、花ちゃん。……そつちの子ね」

「アルバイト仲間の高田君です」

花は微笑んで高田を紹介した。

高田と佳月は同時ににかに氣付くと、一瞬目を細める。お互い、あの歩道橋の男だ、と認識すれば、無言で微笑んでどちらかともなく会釈をした。

「高田です。花さんにはいつもお世話をなっています」

「どうも。私も花ちゃんにはとてもお世話になっていますよ

笑い合っているのに、なぜか張り詰めた空気が流れている。花はそれを感じ取り首を傾げたが、結局理由らしい理由は思い当たらず、そのまま奥へ進んだ。

はたきを手に取れば、花は店内を見渡して呆れ返る。相変わらず、この店を綺麗にしようと心がけるのは彼女だけであるらしい。2日程来ていなければ隅の方にはもう埃がたまっていた。

棚はこまめにやつっているだけあってまだまだ綺麗だ。高田を待たせるのもあまり良くないと考えれば、花は、はたきからワイヤーに切り替え床掃除を手早くやつてしまおうと動き出した。

「花さん、なんで店内清掃なんてやつてんの?・担保の一環?・

「まあねー。ちょっと待つって、すぐ終わるから

「俺も手伝いましょうか?」

「いいよ大丈夫」

仲睦まじいふたりの様子を、佳月はほんやりとながめる。いかにも初々しいカップルといった風情だ。

やがて忙しく動く花の邪魔になると思つたのか、花の傍から離れて高田が店の外に移動してきた。佳月も床掃除ならば自分は邪魔だろつ、と腰を上げた。パイプ椅子がきしり、と音を上げる。

高田の隣まで移動してきた男を、高田はちらり、と横目で見る。視

線を多少上にしなければならないのが癪だと感じれば、高田は小さく舌打ちした。彼自身も背は決して低いほうではないので、余計苛立ちが強くなつたのだろう。

「……あんた、ちょっと勝手なんじゃないの」

低く小さく呟かれた声に、佳月は一瞬反応が遅れる。すぐ横の彼に言われたのだと気が付けば、ふ、と空氣だけで笑んだ。

「君はとても格好良いね」

「馬鹿にします?」

佳月の言葉に高田がますます声を低くすれば、いや、と佳月が首を振る。

「欲しいと、素直に感じて、素直に受け入れられて。彼女の事が好きなんだと、考えるよりも感じているんだね」

「……まあ、子どもですか?」

「ああ、しがらみなんかは俺と比べれば少ないんだろうけどね。でも、ないわけじゃないだろう?君と彼女は同僚なのだし、なかなか後先考えては行動しきれない」

花の動きを目で追いつつそう話す佳月の顔を、高田は見つめた。

なんとかその心を読み取る事はできないだろうか、と必死にその瞳の奥を探る。しかしそれはとても難しい問題のようで、学生である自分には到底わかりそうもない、と自覚してしまつのが悔しかった。高田は、諦めるように佳月から視線を外せば、同じよつともぐくへると動き回る花を見つめる。

可愛い、と呟いて微笑んだ佳月と同時に、高田は心の中で同じ言葉を思っていた。

「……あんた、よくわからない」

素直と叫ぶのならば、今の発言のがよほどやつなのではないかと感じて、高田は声にすすむ。そんな高田にて佳月はへしゃべと笑った。

「終わったー高田君、おまたせー」

「いえ、そんな待つてないですよ

店の奥にいったん用具を置いて、花は高田の前に立つ。それに首を傾げながら、佳月は花へと声をかけた。

「Iのあと予定があるの?..」

「ええ、高田君とひょっと。そんなわけなんで、今日はこれでお暇しますね」

「……そつ」

佳月の哀しそうな瞳に花は首を傾げたが、何かを言葉にすることはなかった。花さん、と高田に呼ばれて意識をそちらにやれば、花はうなずいて歩き出す。

ふたりの背中を見送りながらパイプ椅子に腰掛けた佳月は、気が付けば携帯電話を取り出していた。

どこかに電話をかけている佳月の耳に、猫の鳴き声が聞こえる。姿こそみえないがいつものあの猫だろうか、と考えれば、心を支配する感情に行き当たってしまったかのように気まずくなり、佳月は苦笑する。それでも、彼が電話を切る事はなく、そこでまた自身に苦笑せざるをえなかつた。

「情けないな」

呟いたその声を、果たしてあの猫は訊いていたのか。

佳月は途切れた「ホール音に安堵して微笑めば愛しそうに電話口の相手に、やあ、と挨拶をした。

第八話「動き出したもの」

学生同士が行くには馴染みやすい、某有名チーンの居酒屋にて、ふたりは向かい合つて腰掛けている。

花はちらり、と前に座る高田に視線をやると、彼が微笑む。とりあえずそこまで深刻でもないのだろうかと思えば、花は胸中で安堵する。

思えば、花は高田から相談事を受けた経験が今までになく、だからこそ余計緊張していたのかもしれない。彼がどこか生真面目な部分を持ち合わせているのも知っている分、あまり考えすぎないと良いのだが、と心配だったのだ。

「なに飲みます?」

「ウーロン茶」

花のその言葉に高田が小さく首を傾げた。

「お酒飲まないの?」

花は苦笑して、話を聞いてからね、と応える。こつこつしている事だ。

彼女自身、決してお酒に弱いわけではない。けれどこうやって改まって話があると言われた時は、花はいつもきちんと話が終わるまで飲むのを避ける。相談されそれに対して何か答えようとした際に、酒の勢いで余計な事を言つてしまわないようにといつも花なりの配慮だ。

花もじゅうぶん眞面目といえる人間であるが、花はそれ程に自身を眞面目だとは評していない。それは彼女が全てにおいて四角四面に受け取るような性格ではないからなのかもしだれず、ある程度の柔

軟性があるからこそ更に多くの人間からあれやこれやと厄介事を持ち込まれてしまつ事実を、これまた彼女はわかつていなかつた。

その答えに何を思つたのか高田が微笑むと、じゃあ俺も、とふたり揃つてウーロン茶を注文した。

アルコール抜きでお疲れのあいさつをするのは些かぬけていると思わないでもないが、とりあえずふたりは一口ずつそれを流し込み、適当に頼んだつまみ類をつゝつきはじめた。

「花さんはさあ」

「んー？」

「あのイケメン店長のことビリビリ思つてゐるの？」

「どう、つて？」

「そのまんまの意味」

唐突な高田の質問に田を丸くする花であつたが、佐藤に訊ねられるとああも苛立つのに、彼に訊かれるとそう心が波立たないのは何故なのか。花は苦笑しながらもひょっとして相談事とはそちら方面の話なのだろうか、などと過ぎつつ、うつん、と声をあげて眉根を寄せた。

「なんとも思つてない、つてこのことはまた違つと思つナビ……」「けど？」

先をうながすよつた視線を向けられ、花はひとつため息を吐いた。

「あのひとはなんというか、そういう、うーん、恋する相手としては最悪なひとだらうなつていう認識で、でも男性として見なければいいひとだなあつて思つ、かな」

「ああ、このまえの女性つて、ひょつとして恋人じゃない？」

「気付いてた？歩道橋ですれ違つたひとだつて」

苦笑する花に高田がうなずくと、花も同じように首肯する。

「そり、不特定多数つて感じみたい。でもそれはだから、まあ、自分に害が及ばなければいいのかなといつか」

「……なるほど」

高田が花の言葉を咀嚼するように自身のあいに手をやる。花はそれをぼんやりとみづめながら、次の言葉を待った。

「花さん」「ん？」
「俺ね、花さんが好きだよ」「……はい？」

ふいに咳かれた言葉を、花は俄かには信じられず、苦笑とも單なる微笑ともとれる曖昧な表情を作つては、問つようつて高田の顔をみつめる。

そんな花の視線を受けた向かいに座る高田は、泰然とした様子でゆつたりと口角をあげて笑んでいた。

「……冗談？」「で、済まそうと花さんがするんなら俺はそれなりのことをしてしまいますけど」「なにそれ」「訊くつてことは、俺はそれをしてもいいの？」

微笑みも消して、真剣な双眸が花を射抜いたと思えば、テーブルに置かれた彼女の右手を、高田が自身の左手で握りこんだ。そのとき、一瞬薬指を擦られたのに気がついて、花はその艶を感じる高田

の仕草に羞恥を覚えれば慌てて右手を引き抜いた。

アルコールが入っていないため、顔を赤く染め上げていても何のせいにもできない。花は胸中で「なんことならば、とそれを後悔した。

高田はその表情にすっかり気を良くしたのか、男の顔をそのままに、もう一度微笑んでみせる。それを視界に入れた瞬間、おかしいくらいに花の心臓が跳ねた。

「あの、高田君」

花が何事かを口にしようとするが、先手を打つかのように高田がかぶせて声を上げる。

小さくかぶりを振つて、彼女の発言を封じる事を強調した。

「今は具体的な返事はいりません。……花さん、好きなひととかいる？」

「……いない」

「だったら、急いで断る理由なんてないでしょ？」「これから俺と、色んな事しましょ？ それでも駄目なら、それでいいです」「でも、そんな期待を持たせるような事」

「花さん」

再度塞がれた言葉に、しかし花は不機嫌になる事も、困惑することも出来ずに固まってしまう。射抜かれるように花を見つめるその瞳を真正面から受け止めたのでは、それも当然かもしれない。

「俺、可能性がゼロじゃないんなら縋りたいんだ。あなたの事が、好きだから」

「…………」

「もしも結果が、俺の望むものにならなくても、俺は花さんを責め

たりしない。だから、今断るのだけは勘弁して

「……高田君、私は」

「お願い」

「……ひじめん、私はやつぱり、無理！お試しで、とかそういうことが出来ない！今の時点で高田君は私にとつてかわいい後輩で、それ以上にはならない！」

「でも、どきどきしてるでしょ」

「！」

「俺に好きだつて言われて、今俺と向かって立つて、花さん真っ赤ですよ。すつ」「可愛いくて女の子の顔になつてる」

言葉の数々に顔を赤くする花に、高田はくすり、と空氣を含んだ笑みをひとつ落とせば、席を立つと花の隣に腰をかがめる。花は近づいてくる高田に狼狽すれば、ずり、と右に寄つたが結局横は壁なので、追い詰められてしまえば全く意味はなかつた。

赤くなる花の耳元にそつと唇を寄せると、高田はとひつ、と愛の言葉を囁いた。

「好きだよ、花さん」

「！ わざわざ」

リップ音が花の耳にも届いた。

頬に寄せられた高田の唇の感触に、思わず声をあげた花に、高田は今度こそ声をあげて笑う。

「花さんの悲鳴、色気ないー。でもそつこつといふのも可愛くなあ

「だから君はなにを囁つて」

「諦めないから、俺」

「！」

「もひ、「かわいい後輩」演じるつもりはないから、覚悟しておこ

て、ね、花さん

そう高らかに宣言する日の前の男が、果たして本当に自分の知っている後輩なのか、花はわからなくなってしまいそうだった。

帰り道は、ひとりで帰ろうとする花を引きずつて、結局は強引に高田に家まで送られてしまった。

花の頭の中はどうしたって混乱していたし、想いを告げられ断つた相手に家まで送り届けられるのはなんとか避けたかったが、案外、押しに弱い花は結局アパートの前で高田と別れるはめになる。

帰り際の彼に、花は再度断りの文句を並べ立てたが、高田は意味深に笑い、別れの挨拶をするだけであった。

部屋に入った瞬間に脱力した花は、真っ先に壁際のベッドに倒れこむ。ため息を吐いては、うつぶせていた体を動かしてあおむけにすれば、天井をぼんやりと見つめる。

『好きだよ、花さん』

過ぎぎつた高田の言葉に赤面すれば、とりあえず今日はもう考えるのを放棄してしまおう、と花は立ち上がり風呂場へと向かった。

なかなか寝付けないかと思いきや、花はシャワーを浴びた後、髪も乾かさず気付けばベッドで意識を手放していた。自身の団太さに若干呆れながらも、花はのろのろと冷蔵庫を開く。

気に入りの野菜ジュースを取り出して、扉を閉めれば、パックジュースのストローを外して差込口にぶす、と突き立てた。

喉を鳴らして水分を摂取している最中、花はぼんやりと今日一日の予定を考える。このまま家中にいてもなんだか余計な事ばかり

考へてしまいそうだ。そう思えば、飲み終わり平たく潰した紙パックをゴミ箱に放り、大口であぐびを盛大にしながら洗面台へと歩を進めた。

花は、この家がそこそこの家賃で、そこそこ物件なのだと毎日感じていたが、唯一、洗面台があるのはなかなか気に入っていた。一人暮らしの貧乏学生の部屋には、案外それが備わっていないことが多いのだ。

そんなお氣に入りの場所で顔を洗い、ふう、と小さく息を吐き出せば、鏡に映る顔を花はじ、とみつめる。

「……なにがいいのやら」

苦笑すれば、田の前の人物も花と同じようこうしてみせる。毎日同じ顔を見ていても、彼女が彼女自身をひとよりも可愛いだとか、美人であるとか、そういう感情を持った事はただの一度もない。そんな花にどうして高田が好意を持ったのか、花にはやはりわからない。顔ではない、と言うものの、すべてではないと言つてもやはり抱つていてる部分はあまりに大きい。

花はそれを思えば、やはり人様に好意を抱かれる自分を想像するのは苦しかった。

悶々とした気分を抱えそうになり、思わず花は頬を両手でぴしゃりと打つ。小さくよし、と呴けば、毎日の日課になりつつあるあの場所へと向かおうと決めた彼女だった。

じりじりと日差しが照りつける道を、日焼け止めをきつちり塗った肌で歩く。日本の夏は、湿気もありかなり不快であると訊く。外国に住んだ経験などない花だったが、その言葉を聞くたびに、からり、と晴れたどこぞの国に思いを馳せた。

閑散とした、夜には水を得た魚のように蘇る、いつもの道を歩きながら花はぼんやり考える。何が正解なのかが、わからない。

高田の告白を何度も否定しても、彼は諦めないと。それならば、想う相手がないのならば、それこそ付き合つてみると、この行為をしてみても良いものなのだろうか。

どこか生真面目で初心な花は、どうしても好きから始まる恋でなければ違和感がある。

大人になればなるほど、そういう形のもののはづが稀少であるとわかつていたが、それでも花は自身の気持ちに素直でありたい、と結論を下したのだ。

はてこれ以上どうしたものか。

すっかり困ってしまった花は、これでもかと眉根を寄せながら、腕を組み月見堂までの道を歩いていた。

結局、外出しても考へ込んでしまってはいるが、家の中で悩むよりは幾らかましだ、と半ば開き直つて答へのない問題を頭の中で展開する。

「花ちゃん」

店の前に辿り着いて、顔をあげた瞬間、想定外の場所から声があがつて、花は小さく悲鳴をあげた。

月見堂はシャッターが閉められており、まだ来るのが早かつたか、と思つていたのだが、どうやら花とほぼ同じタイミングで佳月が店へと到着していたらしい。

花のすぐ後ろから佳月の声がして驚いたが、次には振り返れば馴染みの顔がそこにはあつたので、花は安堵の息を吐いた。

「橘さん、おはようございます」

ああびっくりした、と咳きながら花があいつをすれば、佳月はにつこりと微笑んでおはよう、と応える。

今開けるから待つていて、という佳月の言葉に、花は無言で頷け

ば店の前から一步退いた。

少し錆びた鍵穴に佳月がキー ホルダーにもついていない簡素なそれを差し込むと、まわし辛いのか、シャッターが、がたがた、と搖れる音がする。しかし特段の苦労を見せるわけでもなくあっさりと鍵は開き、佳月の手で月見堂は開店した。

花はぐるりと店内を見渡し、今日は埃を取るだけで大丈夫だろうと考えれば店の奥にあるはたきを取ろうと歩を進める。

しかし道半ばで呼び止められ、花は踏み出した右足をぴたり、と止めた。

後ろを振り返れば、佳月が無でもなければ笑つてもいい表情でこちらをみつめている。表現しようとするならば、惑という文字が正しいのではないか、と花は佳月を見て思つた。

「昨日、楽しかった？」

佳月の言葉に、花はどきり、とすれば一瞬頬に熱が集まる感覚がある。なんとか表情を出さないようだと動搖はそれほどまで表に出さなかつたが、佳月はその変化を見逃さなかつた。

いつもは泰然としているその雰囲気をがらりと変えれば、眼光鋭く花を見やる。

花は急に一変した佳月に首を傾げれば、橘さん？と少し不安な声をあげる。佳月はそれが気に入らないのか、瞳の強さはそのままに、花との距離を縮めればするり、と彼女の頬に手を滑らせた。

そんな行為を許した覚えもなければ、何故今そうされているのかもわからない。狼狽しながら花は彼の手を振り払おうと体を動かしたが、次には佳月が花をその両腕に包み込み、すっぽりと抱き込んでしまつ。

ますます狼狽する花をよそへ、佳月は耳元に口を寄せれば囁くように話して話した。

「ひょっとして、告白でもされた?」

「……ど、どうして?」

言に迷ひきれてしまつた事に肩を強張らせながら花が返答すれば、佳月はやつぱり、とため息混じりに呟いた。

「で? なんて答えたの?」

「なんてつて」

花の声に苛立つたかのように腕の中から彼女を解放すれば、しかし次には花の両肩に手を置いて、佳月は覗き込むように花の瞳を真っ直ぐにみつめる。

「付き合つの? 高田君が好き?」

「……橘さん、けつこう他人の色恋話がお好きなんですか?」

「花ちゃん、答えてくれないの?」

有無を言わせぬその迫力に、冗談ぽく口にした花の発言が宙に浮いてどこか気まずい。花は視線をうろいろと上下左右にこまよわせながら、やがて佳月に焦点を合わせればふるつ、と首を振った。

「私は、高田君を好きだと現時点では思えないのに、お断りしました」「……や、うなんだ」

どいか嬉しそうに顔を綻ばせる佳月に首を傾げながらも、いつぞ相談にでも乗つてもらおつか、と花は続きを口にする。

「でも、どうしたらいいのか、正直よくわからない」

「……どうこういって?」

低くなつた佳月の声音に、しかし花は気付くことなく、そのまま発言を続けた。

「高田君はどうしてなのか、私みたいな感じでもいる人間に好きだつて言つてくれました。更に現時点で付き合つている男性も、想いを寄せる相手もいないんだつたら、あきらめないとまで。……私わからないんですよ。期待を持たせるような行為は嫌なので、たとえばお試しでデートをする、とか、そういういた事はしない方がいいと思うんです。でも、高田君はそれじゃ納得しないのかなって」

「…………じゃあ、この先はわからないうことだね」

「それは、そう、なのかもしません。男性として今まで意識した事なかつたけど、彼も普通に男の人なんだなつて昨日は思ったわけだし、まるつきり対象外ではないと思えば可能性はゼロだなんて言い切れないですし。……まあ高田君にはほぼそれに近い事は言つたんですけどね。嘘でも、可能性はないつて言つた方が現時点ではいちばん残酷じゃないんだろうなって思えて」

花の思い悩む様子を間近でながめつつ、佳月は見る見るついにその顔から表情をなくせば、無言で花の顎をつかむ。

それにぎょっとして目を見開いた時には、もう花は佳月によつてその唇を塞がれていた。

触れるようなものであつても、唇と唇が重なつたのは間違いない。花は仰天して固まれば、問うけづな、責めるような瞳で佳月をみつめる。その視線を受けて、佳月はどこか苦しそうに眉を寄せた。

「…………なんでかな。女の子は、かわいいんだけど、昼間は邪魔だなつて思つて、でも夜になると寂しくて、それだけだったはずなのに」

「…………」

身も蓋もないその言い様に、花はみるみる不機嫌顔になつっていく

が、佳月は自身の混乱する胸中をなんとか整理しようと視線をさまよわせている。花は怒りで店を飛び出す事もできたが、彼のぐだす結論が気になればなんとか思いとどまっていた。

「でも、やだつて思った。花ちゃんに、恋人が出来るってわかつたら、すぐ嫌

「……橘さん？」

「俺は」

つう、と冷たい汗が背中を一筋流れ、花はなんとなく覚えた嫌な予感に一歩退いた。

佳月は、まるでなにかがとり憑いたかのようにぼんやりとした目ままにぽつり、ぽつり、と発言する。そうしていつたん言葉を切れば、今度は確かに瞳で花を真っ直ぐと見据えた。

花は不覚にも、その表情に心臓が跳ねたのがわかる。

「好きなのかな、花ちゃんのことが

「……は」

「いや、きっとそういうなんだよ」

「いやあの、橘さん」

「花ちゃん、俺は君の事が好きです」

についつと微笑んで言われた愛の告白に、花は何故だが泣きたくなつた。

第九話「出来れば留めてしまいたかった」

田の前の男を、まるで異星人であるかのように、花は呆然とみつめていた。そのうち穴が開いてしまうのではない程度には硬直した状態を持続させる彼女を、呼び戻したのはその原因である異星人、もとい佳月である。

「花ちゃん？」

鼻先が触れ合ってしまいそうな至近距離で名を呼ばれ、悪い事にそこで素直に意識を覚醒してしまった花は、田の前の状況に混乱の極致へと導かれてしまった。

声にならない悲鳴を上げ、慌てて佳月から離れようとすると、覚束ない足取りで一步を踏み出してしまった為、あらぬ方向へ身体が傾いでしまう。

地面に身体を打ちつけてしまつ衝撃を覚悟して瞬間に花は強く目をつぶる。きしり、と音が耳に届きそうだと錯覚する程かたく閉じた瞼を、花はすぐさま見開いた。想定していた痛みが起るどころか、何かが柔らかく彼女を包み込んだからだ。

瞳は一目見て驚愕の色を濃くした顔だとわかるほど大きくなり、しかし他の部分はなんら反応していないかのように静かで、佳月は抱える彼女のその不安定さに噴出しそうになる。

眉も、唇も、特に何事も意識していない状態のままに保たれており、まさしく無表情といった風情なのに、その瞳だけが大きく見開かれているのだ。混乱しているのは彼女だけだというのもあってか、原因である彼はますますおかしさがこみあげた。

強張った花の身体をほぐすように背中を撫でてやれば、まるで金縛りに遭っていたかのような彼女の右手指がぴくり、と反応を示した。佳月は段々と緩められる力に穏やかに微笑む。そうして気付け

ば真っ赤になつた花の顔を確認すれば、何を思つたのか佳月は背中に回していった右手を彼女の頬へと移動させた。彼の左手はいまだしつかりと花の背中に置かれている。

「あ、の
「ん？」

だいぶ勇気を持つてあげた声はずいぶんと擦れていて、花はこれまで以上の羞恥心を覚えたが、佳月のなんでもないような微笑に幾分か波打つ心を落ち着かせることができた。

ひとつ深呼吸をしたあと、今度は決意した表情で彼女を抱きしめている男と向き合つ。

「どうあえず離してくれませんか

花の言葉に、佳月はあつさつと抱きしめていた腕を下ろし、頬に触れていた手も引っ込める。

「……あの、橘さん
「今まで触つてた所からは離れたでしょ？」
「そういう問題ではなくて」
「逃げられたら、嫌だもの」

ここにひと人好きする微笑を浮かべながらのたまつた彼の右手は、花の左手をしつかりと握り締めている。花は自身が追い込まれた草食動物のように思えてならなかつた。そうなれば、佳月は当然ながら肉食動物であり、結末はひとつしかありえない。

何故か変な方向へと導いてしまつた思考回路をなんとか断ち切ろうと首を横に振れば、佳月が目の前の花に首を傾げる。

頭に疑問符を浮かべるその顔に、花はあなたのせいだろうが、と

囁みつきたい思いだ。

放つておけばめまいを起こしてしまいそうな心境をなんとか建て直し、花はなるべく佳月の距離を意識しないように努める。

「とりあえず、先程の話を整理したいんですが。何かの間違いでなければ、橋さんは、私に、その、好意を抱いていると取つて良いんですか？」

「なんでそんなまわりくどい言い方をするの？」

何故そこでそう返答するのだ、と花は頭の左半分がずきん、と痛みだした。そのうちきちんとした、という言い方はおかしいが、頭痛になりそうだ。となる前になんとか痛みの元を断ち切つてしまいたい。

そう、彼女にとつて、今日の前に広がつていい現実は、なんら歓迎できるものでもなく、ただただ彼女を苛んでいるだけなのだ。

こんなとき、花は自身の真面目さを田の当たりにして落ち込んでしまう。もつと物事を軽く捉えることが出来たならば、新しい世界が彼女を待つていることだな。

しかし、花には出来ない。

普段は表面を撫ぜるように考え、都合が悪ければうつちらるのは彼女のあまり良くない癖だ。すべてにおいて四角四面なわけではなく、ある程度の柔軟性を山田花は持つている。けれども、ひとたび深刻だと思つてしまえば、とことんまで悩んでしまうのもまた、彼女だ。これが花のお人よしと評される部分であり、また、不器用な、所謂人より損をしてしまうような部分であつた。

花は、こんな自分がそう嫌いでもない。すべてにおいて傍観を決め込む事無かれ主義よりは、幾分でも熱くなれる場所があるのは悪い事ではないと思う。しかし、しかしだ。

こんな風に、当事者になつた彼女は、心底思うのだ。深く考えない人間になりたい、と。今回の場合、深く考えない人間であれば最

悪を想定して同時進行のお付き合いも考えられなくも無いが。そんな種類の人間を、花は尊敬も軽蔑もしてはいないが、やはり自分はそんな真似ができるはずもなく、結果、悶々と頭を悩ませなければならぬ事実に今から辟易している。

好意をもらうことが嬉しくないわけではない。しかし、そう単純なことではないのだ。

花は現在、特別に想う人間が存在しない。そうなると、話はずいぶんとややこしくなる。

現時点では、高田も、目の前に居る佳月も、横並びの状態だということだ。つまりはどちらにも可能性があり、どちらにも玉碎がある。そうなつてくるとふたりの行動しだいになつてしまふわけで、花にとつて事態はどんどん悪化の一途をたどつてしまふ。

そんなどこぞの物語のような面倒くさい場所に、花は身を置きたくはない。というか身に余る。花は特別不細工でもなければ、特別可愛くもなく、特別出来た人間でもなければ、特別悪い人間でもない。どこにでもいる、女子大生だ。

それなりに青春を謳歌していそうな、それなりに毎日を過ごしていそうな。恋人が欲しくないわけではないし、作らない主義というわけでもないが、こういった纖細な問題には正直な本音をいえば巻き込まれたくはなかつた。

自惚れではなれば、高田はそう簡単に引きそうにはない。では、目の前の佳月はどうだろうか。

もうすでに花を想う人間がいるとわかつてゐる状態で、彼は花が好きだと告げた。それがどういった種類の好意なのかは今から確認しなくてはならないが、花の考える最悪が当たつてしまつた場合、どうなるのか。

正直、目の前の男はつかみどころがないぶん、後輩である高田よりも恐ろしい。あくまでも花視点ではあるが、佳月の女性事情を思えば、ますますもつて裸足で逃げ出したくなる現実が待つてゐる。

花は肩を少し揺らして、欲しい答えをくれない男へ、再度催促の

言葉を用いた。

「橘さん、あなた私の事が好きなんですか？」

「好きだよ」

さつきそう言つたじやないか、と目を丸くする佳月の横つ一面を思い切り張りとばしたい衝動に駆られたが、そこはなんとか堪えた。

「……それは、あれですか。人として好きとか、友人として好きとか」

「なんでそんなことをあんな改まつて言つの？花ちゃんをずっと隣に置いておきたいから俺は君を好きだつて言つたんだよ」

「別に友だち同士だつてずっといっしょにいようね、みたいな事言うじやないですか」

花の言葉に一瞬考える仕草を見せた佳月は、ふむ、とひとつずく。花はみつともないと思いつつも、彼が高らかに友人宣言をしてはくれないか、と願つてしまつ。

そんな彼の次なる言葉は、やはり彼らしいといえばそつだつた。

「花ちゃんは、友だちつて関係でもキスとかそれ以上をさせてくれるの？」

「！」

「俺以外とはそういう行為をしないって約束してくれるので？」

「いや、あの」

「夜とか、出来るかぎりいっしょにいてくれるの？」

たたみかけるような佳月の言葉を遮るよつて、花はおおげとこぐり、と頃垂れれば、力なく呟いた。

「それはもはや友だちとは言こません……」

花の言葉に何が楽しいのか弾んだ声でそうじょひ、と佳月が答える。花は下を向いたことで視界に入った自身の左手をながめて、ため息を吐く。

「無理です、嫌です」

花の物言いが気に入らなかつたのだろう。む、と眉を顰めた佳月は、握っていた手に力を込め、花の左手をよつ強く包んだ。

「高田君には保留みたいなお返事をしたんでしょひへ

「きつぱり断りましたよ」

「でもまんざらでもないみたいにな」とわざわざ聞かれてたじやな

「それはまあ、そうですけど」

「高田君は脈ありで俺は完全になじつてい」とへなぜ?

じりじりとまたも距離を縮めてくる佳月に、花は後退する。しかしどんなに離れようとしても、佳月が花の左手を握っているため一定の距離しか稼げない。花は焦りと共に、佳月を落ち着かせようと声を上げる。

「いえ、べつにー・高田君だつて脈ありといわけでは

「でも可能性はゼロじゃないんだよね?」

「絶対とは言えない、とは確かに先程発言しましたが

「じゃあ俺にも可能性あるよね?あきらめなくたつていいんだよね?」

「橘さんは複数の女性と関係してるのでよつー少なぐともそんな男性は嫌ですか?」

追いつめられていたとはいえ、あまりこの問題を取り沙汰したくなかった花にとって、それは禁句であった。

佳月が言ったことによて傷つくかどうかはわからないし、事実は事実なのでその点を反省するつもりはあまりない。とにかく佳月が女性にだらしないらしいという問題について、花は出来ればずっと無視を決め込んだかったのだ。何かの拍子に、そんな面を發揮されたら困るのは花なのだから。

そろり、と彼の表情を花がうがつてみれば、佳月は怒るでも嘆くでもなく、ただただ彼女をみつめている。その顔は、無垢な子どものような純粹さがどこかあり、花はなんとなく直視をためらった。いつまでも黙りこくっている佳月にたまりかねたのか、花は遠慮がちに声をかける。呼びかけた彼女の声に反応して、佳月がやつとああ、と声をあげた。

そこでやつと、佳月はわかりやすく表情を露にする。困ったように微笑む彼を視界に映した花は、その意味を考えてみる。

やはり彼のような男は、ひとりに絞り込むことが嫌なのだろうか。ならば今、困った顔で花をみつめるのもわかる。きっと彼はいま花と数多いる女性とを天秤にかけて、どちらに傾くべきかで迷っている。そう結論をくだしたところで、ずいぶんと素直な性格だな、と呆れるわけでもなく感心してしまう。

いくらでも誤魔化してしまえばいいのに、変なところで佳月は純粋だ。

しかし、すっかりと彼の心を性格に読み取ったと思い込んだ花は、またも予想外な彼の言葉に驚かされた。

「ごめんな。そんな」と言われると思わなかつた

「……はい？」

「だって、花ちゃんがいれば彼女たちを相手にする必要がないし」「はい！？」

花のすっとんきょううな声に、佳月はつづき、と首を傾げる。

「云わつてるものどばかり思つたけれど……そりじゃなかつたんだね。ええと、俺はね、別にたくさんの女の子と関係を持ちたいわけではないんだよ」

「え、でもだつて……」

「別にそういう行為が特別好きつてわけでもない」

「ええ?」

佳月の言葉を聞けばきくほど混乱していく花を眺めつつ、佳月は実際にマイペースに伝えたいことを紡いでいく。

「俺はね、眠れない夜があるんだ。そんなときはひとりで居たくない。だから、隣に誰かがいてくれるだけでいいんだ。別に男だつてかまわない」

「…………」

「でも、ベッドを共にする、どうじたつてむけいぢやうこいつのを期待するでしょ。俺は望まれればそういうことをするナビ、俺自身がしたいのかつて言つたら、どちらでもかまわない。……いや、どちらかといえば、したくな、のかもしぬない」

固まる花を他所に、とんでもなことのようなうでもなことのなことをつらひりひり花に話しながら、佳月は肩を竦めた。

「さつき男でもいいって言つたけれど、そろそろ親切な友人なんてつかまらないし、男性相手にする才能はないから、必然的に女性を誘うしかなくなるでしょ。で、結果的になんだか乱れた生活をしているように見えてしまつけれど」

「いや、あなたの眞実と相手の眞実に齟齬があつたとしても、事実そうでしょ、乱れてるでしょ、よつてじやないでしょ」

「言葉尻をとつてつづけのはよくなないな。花ちゃんにこじめられた

ら、俺泣こむよ」

「そんな纖細さがあなたにありましたか」

思わずつっこんでしまい、更に言葉を重ねたところで、花はいや、
と自身の口を否定する。

纖細、なのだ。

橋佳月という男は、事実、非常に纖細なのだ。だからこそ夜があり、だからこそ女性たちに偽名を使つ。そうまでして、暴かれたくない何かがあり、また、#しきりめる句があるのだ。

花は、もう隠すこともなく素直に呻き声をあげた。
なんて、ああなんて。

「……橋さん、超めんどくさい」

所謂わけありな人間、なのだろう。わかつてはいたが、本当になんなくしかわかつていなかつた。

今の言葉が、単に花をたらしむ方便などとは、どうしても思えない。口説く為の言い訳ならば、別にこんな作り話をつらつらと並べ立てる必要はない。

適当な愛の言葉を囁き、適当な約束をすれば良いだけの話だ。もう君だけにするよ、と。……言われたところで胡散臭いことに上ないが。

もしも今までの言葉がすべて偽りであるならば、策士を通り越してただの阿呆だと花は思つてしまつ。関心をひくどころか完全にひいてしまう。母性本能をくすぐられるような女性も中にいるのかかもしれないが、正直、稀だらう。

まあ、簡単に言つてしまえば、花は佳月の言葉をそれなりに信じることは出来た。ゆえに、口をついたのが先程の台詞だ。あまりに

も自然に出してしまった為、言ってしまったあとのことを考えていなかつた。

慌てて口を押さえてももう遅い。さすがに失言であつたと佳月をみれば、彼はもうだめだといわんばかりに噴出した。

盛大に声をあげて笑う彼を見て、花はまたしも驚きに固まつた。今はもう離された手にも気付くことなく、あんぐりと口を開けている。間抜けといえなくもない。

「あつはははは！花ちゃんてやつぱり良いねえ。そつそつ、俺はとつても面倒な男だよ。わかつていなかつた？」

「……はあ、なんとなくは

「じゃあ予想以上だつたかー、あーおかしい」

田の前で笑う男に、何がおかしいのか、と胡乱な表情を向けてしまつのは、現状致し方ないことではなかろうか、と花は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3154t/>

路地裏のお月様

2011年10月9日09時48分発行